フォルカニア王国
調査部 2



目次　一ページ
登場人物　二ページ
第三話　四ページ
第四話　百五十三ページ



タカセ　リュウジ

主人公。異世界に
召喚され調査部に入る



クズハ

狐神。
冷静でやや辛辣



サリエル

調査部のトップの天使
天界と人間界の橋渡しの役目も負う



カイル
調査部の一員
戦闘、情報集めと
一通りできる中年



マリス
調査部の分析担当
肩書は魔導士だが錬金術、
医学知識もある才女

第三話　婚約破棄

ここは洋館のホール。

中は煌びやかに装飾され、華々しい雰囲気が漂う。

集まる人々はそれに見合う人なのだと一目で分かる集団で、いわゆる上流階級の集まりだと分かる。

用意される飲み物も一般の人が飲むような物とは味も値段も違うのだと主張している。

男性は堂々と、女性は可愛らしくおめかしををして語らいのひと時を楽しんでいるようだ。

そんな中、一際注目を集める二人。

若くして権力と実力を高める貴公子と、花のような可愛らしさ

が目立つ女性。
その二人に集まる視線は普段は羨望のそれであるが、今日は違うようだ。
賑やかな雰囲気は打ち破られる。若い貴公子によって。
「我が婚約者、リリアンよ！　私は宣言する！」
みなの注目が一層集まる。そんな中でその男は続ける。
「この俺、ユリウスはお前との婚約を破棄する！」
どよめく会場。
そして崩れ落ちるリリアンという女性。
年の頃は二十歳前後だろうか？　可愛らしく、清楚に整えられ

た衣装で朗らかな笑顔を湛えていた彼女は絶望のどん底へと落とされた。

そして言う。

「そ、そんな！　なぜですか!?」

悲痛な叫びに、男は答える。

「分からないのか？　いや、とぼけてるふりか。シラを切るのもいいだろう」

「私には何の事だか…」

「ふん…お前の数々の狼藉、すでに報告は受けている。その胸に聞いてみるんだな、元婚約者、リリアンよ」

「ま、待ってください！」

だが彼女の懇願もむなしく、男はその元婚約者とは絶縁する意思を変えようとはしなかった。

彼は周りに居る女性を見ながら言う。

「私はこれから新しい婚約者を探す。お前はどこへなりと行くがいい」

そんな風に言う彼の傍らには煌びやかな衣装に身を包んだ女性や淑女が多数。

そしてユリウスに近しいのだろうか、彼の身を案ずるようにする女性が一人居た。

そしてその悲しい雰囲気の中、ユリウスと女性たちとは別に一際感情を高ぶらせる人物がまた三人居た。

困ったような顔の執事、感情を抑えては居るが何か言いたげなメイド長、そして無表情の小さな女の子だった。

詰め所で書類仕事をする俺たち。
そこへ入って来たサリエルは言う。
「ちょっといい？　魔族が出たわ」

みんなでボードの前に集まる。
「目撃地点はここよ」
俺は言う。
「侯爵邸宅近くか」
クズハも意見する。
「こんな町中で目撃？　何があった」

その言葉にサリエルが答える。
「少しゴタ付いててね」
なんとも歯切れの悪い説明にカイルはなぜか納得してるような顔で言う。
「例の騒ぎの件か」
サリエルは「そうよ」と言いながら説明を続ける。
「少し前だけど、ちょっとした騒動があったの」
俺は「騒動？」と聞くとカイルが続けた。
「婚約破棄騒動だ」
随分気になるワードに俺は質問してみる。

「なんだそれ…貴族の色恋沙汰のスキャンダル騒ぎか？」
俺のその言葉にサリエルは補足する。
「大変な騒ぎだったのよ。その関係で少し町がザワついてたの。そんな混乱の中で警備が手薄になったのかもしれないわ」
「それは中々大変だな」
「最近だと侯爵邸の敷地内にも目撃例が出たとの事で、うちに連絡が来たのよ」
「貴族様の護衛の依頼か？　門外漢じゃないのか」
「まあ、とにかく人手が欲しいそうで、何らかの出没の目的があるなら調査しておこうかと思って」

「何でも屋だな、うちは」
「そう言われればそうだけど、これも仕事の内よ」
サリエルはそうまとめるとカイルもボードの前に出て資料を説明しだす。
「じゃあまずは関係者の確認だ。邸宅はオルフォード侯爵の屋敷だ。ガリウス・オルフォードとマイサ・オルフォード、それにご子息のユリウス、妹のメアリー、そして執事のスロスとメイド長のキンバリー、それに住み込みのメイドたちが多数だ」
クズハが質問する。
「婚約破棄された人物は？」

「リリアン。悪い噂が立ってユリウスは婚約を破棄、彼女は今町の中の家で暮らしている」
クズハは続けて質問する。
「警備は？」
「町中には巡回の兵士たちが居る。屋敷内でも兵士を雇うか準備してる頃だろう」
俺は言う。
「貴族と執事とメイドか。立派な家柄なんだろうな」
その言葉にサリエルは答える。
「そうよ。だから失礼の無いようにね。みんなで邸宅を訪問して、

それから警備に協力よ」

「了解」

こうして俺たちはユリウスの邸宅へ向かった。

町中の通りを進むと大きな屋敷が見えてきた。

綺麗な白塗りの洋館は敷地も大きく、柵の中はよく手入れされた庭が見え、格式高い人間が住まう場所なのだと知らせる。敷地は中々途絶えることなく、玄関に回り込むまで時間が掛かった。

その玄関を通り、立派な両開きの門を叩く。

今日はカイルが先頭だ。

「すみません、調査部です、警備の手伝いの連絡で来ました」
そう言うと重苦しい音を立てて門が開く。
メイドの一人が対応してくれる。
「連絡は受けております、応接の間へお通ししますので、どうぞこちらへ」
そんな挨拶で屋敷の中へ。
メイドの態度は普通に見えるが、魔族が出たからか、それとも婚約破棄の騒動があったからか、やや硬い印象を受ける。
洋館の造りをした広い屋敷の応接間はかなり手入れされており、

こちらもいささか緊張する。
フカフカのソファに座り待つ事、少し、執事の男性が現れた。
初老の男性は少しだけ疲れたような感じを受ける。
俺たちは立ちあがり、彼の挨拶を受ける。
「よくおいで下さいました、調査部が出てくるとは…御足労をお掛けします、執事のスロスです。お時間が掛かりまして申し訳ありません、少しゴタついておりまして」
カイルも頭を下げ言う。
「どうも、カイルです、こっちはタカセとクズハ、よろしくお願いします。ゴタついてるとは？」

「当家の騒動については？」
「聞いてます。婚約破棄だとか」
「お恥ずかしい話です。一段落ついて今日明日で元婚約者の方の荷物の引き払いなどがありまして…」
「そうですか、それは災難が重なりましたね」
「ええ…それにしても、調査専門の機関が出てくるとは、何か大きな問題になっているのですか？」
「いえ、現状では危険は無いと思います、ただ魔族に屋敷の敷地内まで入られたとの事で、念の為に派遣されました」
「左様でございますか」

「何もないとは思いますが、魔族を引き寄せるような物品や原因が無いかを含めて、警備と調査を行いますので」
「こちらで出来る事は協力いたします」
「よろしくお願いします」
そんな挨拶を終えた所で俺が切り出す。
「ところで、ユリウスさんは？」
「はい、ユリウス様とご両親は外遊に出られております。諸外国の貴族との交友を深める為に」
「長期不在って事か」
「左様です。ユリウス様たちが返られるまでは私とメイド長のキ

ンバリーがお屋敷をお支え致します」
「ユリウスさんには妹さんが居ると聞いてます…挨拶しておきたいんですが」
「ええ、メアリー様は自室に居られますので、屋敷内の地図をお渡ししますのでどうぞ。雑用はメイド長が担っておりますので彼女にも話を聞くとよろしいかと存じます」
「分かりました」
こうして俺たちは地図を確認し、挨拶を済ませ、初動捜査としてさっそく行動に移したのだった。



ユリウス
オルフォード家の
次期当主



メアリー
ユリウスの妹



リリアン
ユリウスの元婚約者
婚約破棄された



ポーラ
メアリーとユリウスの
知合い



スロス
オルフォード家の
執事



キンバリー
オルフォード家の
メイド長

カイルは言う。

「どうも、はじめまして」

メイド長は俺たちの挨拶を受ける。

そのメイド長は深くお辞儀をする。

「どうも。メイド長のキンバリーです。以後、お見知りおきを。お仕事、お疲れ様です。ご迷惑をお掛けしますがよろしくお願いします」

メイド長は五十歳前後だろうか、年の割には体力はしっかりしてそうな感じだ。年季も入っており厳しそうだが仕事はしっかりこなすタイプに見える。

そしてその横には一人の女性が。
カイルは尋ねてみる。
「失礼ですが、こちらの方は？」
年の頃は二十歳前後だろうか？　ショートヘアに小奇麗な服装の女性はメイド長が紹介する。
「こちらはポーラ様です」
紹介された女性は挨拶をする。
「ポーラです、お屋敷に住まわせていただいてる者です、今回の騒ぎには驚いてますがお手伝いできる事があれば言いつけてください」

カイルは質問してみる。
「メイドさんではないですよね？　どのような間柄で」
その言葉にキンバリーメイド長は返答する。
「ポーラ様はユリウス様とは多少の縁がありました。妹のメアリー様がポーラ様と仲が良くなったので、色々と懇意にしていただき、当家で過ごしていただく事になりました」
「そうですか。分かりました」
自己紹介も終え、カイルは状況を確認する。
「早即ですが事情をお伺いします。魔族が屋敷に侵入したと聞いてます、資料は確認しましたが」

メイド長が答える。
「深夜の事でした、見回りをしているメイドの一人が外の暗がりで動く影を発見、明かりで照らすと怪しい影が見えたと」
「魔族だと断言した理由は？」
「目が光っていたと言うのです、耳のシルエットが尖っていたとも」
「北側へ逃走したとの事ですが合ってますか？」
「ええ、あちらには勝手口がありますので、そこから逃げたのかもしれません」
今度は俺が質問をする。

「被害は無かったんですよね」
「ええ、幸いにして。怪我人もおりません」
クズハは続けて聞いてやりとりする。
「盗まれた物は？」
「それもありません」
「見た所裕福な屋敷だ。高価な物はどこかにしまってあったのか？」
「宝物庫のような所は厳重に管理されています。鍵も掛けてありますので」
カイルは言う。

「あとで確認させていただいてもいいですか？」
メイド長は「はい、こちらが鍵になります」と鍵束を渡してくれた。
カイルは最後に言う。
「屋敷内の確認が済んだらお返しします。あと、今夜は戸締りをしっかりして休んでください」
その言葉にメイド長はやや安堵したようで「はい、よろしくお願いします」と返した。そんな彼女にカイルは付け加える。
「あとユリウスさんの妹のメアリーさんにも会っておきたいのですが」

「メアリー様は東側の二階の奥の部屋です、少々人見知りする方ですが」
「ありがとうございます、会って挨拶をしてきます」

俺たち三人はメアリーの部屋を訪れノックする。
コンコン…
驚かさないように優しくドアをノックする。
「メアリー、すまない。少しだけいいか？　調査部のカイルと言う。兵士さんたちと協力して町や屋敷の警備をしてるんだ。部屋の中を確認したいんだが開けてくれるかな」

…

少しの静寂のあと、声がする。

「今…開ける」

それから…キイ…とドアが少しだけ開いた。

こちらの顔を確認してからドアを全開にする。

そこには資料で確認した小さな少女が居た。

可愛らしい、というよりは、やや血色の悪そうで無表情な顔をしている。その少女にカイルは告げる。

「悪いね。何もないとは思うんだが安心して過ごせるようにチェックが必要なんだ。入ってもいいかい？」

「…」

少女は少しの間考えるとコクン、と頷いた。

俺とクズハはカイルに続き静かに部屋へと入る。

俺は室内を見渡しながらメアリーに声を掛ける。

「綺麗な部屋だね」

怖がらせないように無難な言葉を選びながら。

だが少女から返答はない。怒っている訳ではないようだが、あまり表情が変化しない。普段はあまり人と喋らないのだろうか？

メイド長も「人見知りする」と言っていたな、そんな事を思い出す。

なんだか独特な感性を持っているような感じの子だ。
そんな事を考えながら部屋を確認する。
まずは窓辺から。
しっかりと閉じられている。少し開けて外を見るが、やはり気になるものはない。
今度はクズハがメアリーとやりとりする。
「この扉は？」
その問いに少女は答える。
「クローゼット」
「念のため見てもいいか？」

「…いいよ」

返答を受けてからクズハは中を確認する。中には数着の服と本。気になる物はないようだった。確認を終わらせてからドアを閉じ、俺と部屋を見回す。

綺麗な部屋だった。

それしか言いようがない。ただ、煌びやか、という意味ではない。

物がない訳ではない。机の上にはそこそこな数の本。それに気になるものは小さな水晶玉みたいな置物。それだけだった。

小さいとはいえ、学舎の幼年組だろう。色々と楽しみが増える時

期だろうに、一般的な子供が好きそうな小物らしい小物などはない。整っている、というよりは少しだけ殺風景とも言えた。
それに薄暗い。なんだか魔法使いの研究所のような雰囲気を感じさせる。年頃の娘の部屋ならもっと明るくてもよさそうだが。
ただ、メアリーの性格を考えればこんなものかもしれない、とも思う。あまり他の子どもと同じ趣味を持つタイプではない、…失礼だけどそんな風に考えてしまった。俺の偏見に満ちた考えをやめるように自身で頭の中で払いつつ、机の上の数冊の本を見て言う。
「本が好きなのかい？」

「…うん」
「触ってもいいかい」
聞くとやはり無言でコクン、と頷く。
手に取ってみた本は少しだけ分厚く、重みのある本だった。それを少し開く。中には文が羅列されていて所々に挿絵がある本だった。
「へえ…こういうのが好きなのか」
「…うん」
絵本などとは違い、若干大人びている子供が読むようなものだった。

「こっちは…童話かな」
パラパラとページをめくり、中を確認してみる。小さな男の子と女の子が小さな冒険するような内容でよくある内容のようにも思う。
女の子が好むようなお姫様のストーリーではないが、こんなものか、などと感じながら本を戻した。
「こっちの本は…なんだか難しいな…魔導書かな」
手に取った他の本もなんだか難しい文字や図形が描かれており魔導書のような感じの物まであり、やはり普通の感性ではないように思える。

俺は部屋を見回しながらクズハに言う。
「この歳で魔導書に興味を持ってるのは珍しいが、他は特段、気になるものはないな」
クズハの方も目立ったものは見つけられないようでこの部屋に問題はない、との見方だった。
俺は少女に言う。
「ありがとう。突然ごめんな」
「…何かあったの？」
少女は俺に質問してくる。
…やっぱり、感じてしまうか。子供と言えど、やはり気付いて

しまう。普段と違う訪問者、執事の態度。あるいは屋敷内の人の雰囲気で。

俺はクズハと一瞬だけ目線を合わす。

正直に言うべきか…数舜だけ惑いながら、返答する。

「大丈夫だよ。町の中で少しだけ問題があってね。でも今は兵士たちの人もここに来ている。心配いらないよ。ただ、窓は開けないようにね。戸締りはしっかりしてほしいんだ」

「窓…？」

「そう」

「泥棒さんとか出る？」

「泥棒さんも閉まってれば入れない」
「…じゃあ…しっかり締めるわ…」
「よし。えらいぞ。あと、執事やメイドさんの言う事はよく聞いてな」
「…うん」
「良い子だ」
相手の表情は相変わらず変化しないが、俺の方は笑顔で少女とコミュニケーション出来た事を少し嬉しく思いながら部屋を出る事にする。
「お邪魔してごめんな。じゃあ」

そう言って退室する事にした。

応接間に戻った俺たちは執事さんに言う。

「一旦これで失礼します。昼間は町も人通りが多く魔族も近づかないでしょう」

「分かりました」

「夜にもう一度伺います。それで夜間警備をしましょう」

そんな挨拶をして詰め所へ。

サリエルは俺に聞く。
「どんな状況だった？」
「今の所被害はないみたいだな。ただそこが気になる。目的があるなら再度襲撃する筈だ」
「今回は襲撃前の下見だったって訳？」
「どうだろな…いずれにしろ不明な点がいくつかあるんだ」
「そうよね…わざわざ町中に単独で…貴族と言っても軍人ではないし…ユリウスを襲っても魔王軍が得るメリットが分からないのよね」
「当のユリウスは不在だったしな。下見に来るのにその辺りを調

べてないなんてのも少し疑問が残る。そこら辺も含めて警備しながら情報を集めてくる」

「分かったわ。夜に向けてしっかり準備してね」

こうして俺たちは休息と準備を行うのだった。

夜。すでに町の灯りは消えつつある。

そんな中で屋敷へ赴き、広間で打ち合わせをする。

執事さんは夜遅い時間まで起きていてくれて俺たちを出迎えて言う。

「こんな時間まで助かります、こちらの広間はどうぞ休憩にお使いください。窓からもある程度敷地を眺められます」
カイルは言う。
「助かります」
「私はこれで失礼させていただきますが飲み物や軽い食料は用意してありますのでどうぞ」
「では、この部屋で待機しつつ、定期的に巡回します。ゆっくり休んでください」
「はい、よろしくお願いします」
そんな打ち合わせをして警備に当たる事にした。

暗闇に包まれた屋敷。

すでに日没からかなり時間が経過している。

付近の家々はすでに夕ご飯を過ぎている時間で寝静まる時間帯に入ってきた。

まだ起きている家もいくらかはあるが、それも少ない。所々で点在する家々から漏れる淡い明かりは少し綺麗に見えた。

付近の家屋の落ち着いた色使いや白い家などが建つここら辺は夜になっても不気味な雰囲気にはならず、閑静な住宅街の穏やか

な雰囲気のままだ。

魔物が出た、という情報はあるけれど、緊張ばかりもしていられない。

戸締りなどをしっかりして、住人たちは今は静かな時間を過ごそうとしているのだろう。

夕ご飯の支度などで慌ただしかった家の中も、今は片づけが終わり一家団欒の時間を終え、就寝している時間だろうか。そんな事を考える。

屋敷の外にすでに人通りはない。

そんな遅い時間帯から屋敷内の見回りを数回こなす。そうして

いるうちに時計はすでに二十四時を回った。
クズハと二人で巡回を行う。不測の事態に備えるが、今は静かな時間だった。
俺は「異常なし、と…」と独り言を言う。
屋敷の廊下を歩き、警備用の宛がわれた部屋に入る。
そこで待っていたカイルと落ち合う。彼は言う。
「どうだった？」
俺は静かに答えてやりとりする。
「まだ。何も。平和なもんだ」
「念のため屋敷の外も見回ったが静かだった。町の中は二人一組

の兵士たちが交代で見回りをしてる。異常は無い」
「そうか。じゃあ町の方は心配ないな」
カイルも同意のようで「しばらくはこの部屋で待機しつつ監視を続けるか」と言った。
こうして深夜の警備任務は時間が過ぎていった。

いくらかの時間が過ぎたあと…
俺は窓の方へ寄り外眺める。。
今はそこからはクズハが窓の外を監視している。
俺は彼女に語り掛ける。

「静かな夜だな、見通しはどうだ？」
「ああ。執事の手配で松明が焚かれているからいくらかは視界も確保できてる。望遠鏡無しでも一応の警戒は出来るな」
「頼りにしてもいいのかな？　お狐様」
「狩りの腕は落ちていないつもりだ」
「そいつは頼もしいな」
クズハはニコリともしないがなんとも頼りがいのある相棒だと思う。
そんな俺たちにカイルは言う。
「屋敷内も昼間よりは薄暗くて視界も悪い、巡回中は注意が必要

だな」

俺はクズハと外を眺めながら続けて言う。

「一回目の侵入から時間を置かずにもう一度侵入の可能性は微妙だが、警備も増えてる。少しは落ち着いた状況が続くといいんだけどな」

そんなやりとりをしながら少しだけ休息をとった。

カイルは言う。

「待機中に整理した資料から分かったんだが、ユリウスの父親、ガリウスは騎士団として魔王軍討伐隊に参加した事があるらしい」

やや驚きの情報で俺は聞いてみる。
「魔王軍討伐隊？　貴族が直々に？」
「騎士の称号も持ってて実地訓練の一環だな、騎士団に配属されて従軍してる」
「じゃあ、その時の魔族との戦闘が今回の事件の発端なのか？」
「可能性はあると思う。もう少し詳しく調べてみないと分からんが」
「明日当たり担当部署にあたってみるか」
そんなやりとりをした。

交代で窓の外を監視したりしつつ時間が過ぎる。
今はカイルが窓の辺りから外を見ていてくれている。
そんな中、クズハは言う。
「侵入経路は特定できたのか？」
「前回はどうも屋敷の北側らしいと調査されたみたいだな」
「見回りの重点ヶ所を見直すならその辺りから警備が必要だな」
「屋敷内の地図も把握したが、相手に隠れられたりする場所をもう一度確認するか」
そんな風に言いながら机に並べられた資料を確認する。
俺は紙の束を見ながら今後の方針について考えているとクズハ

が言う。
「飲み物を飲むがお前とカイルもどうだ？　私は紅茶にするが」
俺は「そうだな、頼む」と言いカイルも「水があったら水で頼む」と返す。
クズハは言われて屋敷で用意してくれた飲み物をコップに注ぎ俺とカイルに配る。二人で、サンキュ、とお礼を返す。そしてクズハは言う。
「もうしばらくは様子見か」
「魔族が出ないならそれはそれでいいしな」
そんなようなやりとりをして夜の監視は時間が経っていく。

それからも静かな時間が流れる。監視と見回り、そんな行動を何度目か繰り返した後。

俺はボソっと言う。

「ちょっと席を空けるぞ」

「どこか行くのか」

「行くって言うか…ヤボ用だ」

「ヤボ用ってなんだ」

「…用を足したい。さっき水分も取ったからな…ちょっと失敬」

クズハはやれやれという顔をして言う。

「念のため二人で行動するか？」
「いや、トイレはそんなに離れてない、大丈夫だろ」
「なら早く行ってこい」
「そうする、大邸宅の優雅なトイレを借りてくるとするよ」
軽口を返しながらこうして俺は暗闇の屋敷へ。
裕福な屋敷なので深夜でも所々明かりが点いている。
ただやはり少し雰囲気は暗い。
そんな屋敷内を歩きながらお手洗いへ向かった。
この時、特段気になる事は起こらず俺は目的を済ます事が出来た。

「わるぃ…戻った」

「…」

クズハは無言でカイルは「お疲れさん」などと軽口で迎えてくれた。

それからまたしばらく時間が経った。

カイルとクズハは交代しており、クズハが窓の外を警戒してる。

そんな彼女に近づき、俺も闇夜に目を凝らしながらクズハに言う。

「なあ…魔物はまだこの辺りをうろついてると思うか？」

俺の問いかけにクズハは少し考えてから言う。
「どうだろうな…もし魔物がこの町で悪さを考えているならこの辺りに居てもおかしくない。町の中心部はうろつかないだろう。この住宅街の空き家なんかを探してそこに潜伏してる可能性はあるだろうな」
「と、なると…このままだとその空き家から出てくるのを待つ感じになるか」
「潜伏してる前提の話だがな。来る途中で明りの点いていない家は少し把握しておいた。単に留守とは違うような家は、手入れされていない庭などで分かる。ここからは少し見えないが中心地の

方とは逆の方へ行く途中の何軒かだな」
俺は感心して礼を言う。
「助かるよ。よく見てるな」
「たわけめ…もっと周囲の状況に気を配れ。あともっと褒めるがいい」
「怒ってるのか機嫌がいいのかはっきりしてくれ…」
「私の方に気を回すな、監視に力を入れろ」
「了解…」
俺は言われて辺りの監視に戻る。
そして見ながら話を続ける。

「なあ…悪魔の目的はなんだろうな？」
「目的？」
「ああ…なぜこの町に来たのか…」
「それは魔族だから暴れるなり略奪なりだろう」
「でも住宅街の近くで出たのに今の所被害は無し。なぜ何もしなかった？」
　クズハは冷静に考え可能性を導こうとする。
「一匹で来て引き返すのも変だな。単独で町に近づくほどマヌケでもあるまい」
「案外トイレを借りに来ただけかもしれないぞ、さっきの俺みた

いに」

俺の軽口に呆れたような表情になるクズハ。そしてまるでため息でもつかんばかりのような口調で言う。やれやれといった風に。

「どこの世界に呑気にトイレを借りに来る悪魔が居るんだ…」

「それは分からないだろ。ちょっと借りに来る魔族も居るかもしれない」

「例えばお前が魔界に行った時、魔族の住み家にマヌケにもノックして　ど～も～すみませんちょっとトイレ貸してくれませんか～って訪問するか？」

「…餌食だな…」

俺は少し青い顔をして言った。
クズハはそうだろう、と言わんばかりに続ける。
「それと同じだ。魔族がわざわざ人間の住み家に用を足しにノコノコ来るわけがない。襲うならともかくな」
「おっしゃる通り…」
少しだけ渋い顔をして答えた俺。カイルも何も言わず聞いていたがなんだか微妙な表情をしていたのでどんな風に思われたかはすぐに察しがついた。
クズハの呆れた意見は続く。
「まったく…適当すぎる…もう少し思慮深くだな…」

「はいはいすみませんでした。今度からはよく考えて喋ります」
クズハのネチネチしたご高説が始まりそうだったので俺は慇懃無礼に謝る事にした。
そんな他愛無い時間が過ぎ、今夜は何も無いかもな、そんな風に思い始めた時だった
悲鳴が響いた。
「キャー！！」
俺とクズハは駆け出す。
「カイル、執事さんに連絡を！」
二人で暗い屋敷内を疾走する。

声のした方へ目まぐるしく駆ける。
闇夜の窓辺を走り抜け、通路を曲がり、転々と灯る照明が後ろへと流れていく。
やがて通路の先に人影が。
壁に寄りかかり、尻餅をついているようなメイドさんに駆け寄り声を掛ける。
「大丈夫ですか!?」
「ま、魔族が!!」
「どこですか!?」

俺たちはいつでも応戦できるようにしながら注意深く質問する。
すわ、戦闘か、そう思いながら聞くとメイドは言う。
「そ、そこです…」
彼女の指差す方を見ながらクズハが聞く。
「どこだ？　あの扉の向こうか？」
彼女はおずおずと言った。
「ト、トイレの中に魔族が」
…
そのセリフに俺とクズハはさっきの話を思い出し、訝しげな表情でお互いの顔を見合わせてしまうのだった。

警戒しながらわずかに開いたドアの両サイドに俺とクズハは背を付けて張り付く。
頷いてドアを蹴飛ばし中へ。
クズハは具現化した破魔矢を構えている。
トイレの前にある洗面台。
その奥に二つのドア。
それを見ながら俺は視線で合図する。
クズハの破魔矢はトイレに向けられる。
俺は手でスリー、ツー、ワン、と合図する。そして俺がドアの

取っ手を引きドアが開け放たれる。
俺はややドアの脇に避けつつクズハは破魔矢で狙いを付けた。
…
…だが中にあるのは魔族の存在ではなく、綺麗に整備された洋式のトイレ。格調高い屋敷にふさわしい清潔なお手洗いだ。
俺は警戒を続け、もう一つのドアへ。そして同じ動作で中を確認する。しかしやはり何もない。
窓のような物もなく、逃げ道はない筈だが…
クズハは破魔矢を一旦下げる。
トイレの中はとりあえず危険はないようだ。

俺たちは外へ出る。
「どこへ逃げたんだ？」
ほどなく、連絡を受けた執事さんとカイルが到着した。

広間で打ち合わせをする。
カイルは言う。
「町を警備してた兵士たちも応援に来てくれた。屋敷内を捜索したが魔族は居なかった」
俺は「何をしてたんだろうな」と疑問を口にしてカイルとやりとりする。

「足跡がわずかについていた。それを調べたんだが、メアリーと元婚約者のリリアンが使っていた部屋に行ったみたいだ」
「攻撃されたのか？　メアリーは？」
「無事だ。単にその辺りをうろついただけなのか、被害は無い」
「部屋に侵入された訳ではないのか？　…まあ怪我が無いならいいけど、魔族は一体何をしに来たんだ？」
「これは夜通し調査が必要だな」
もとより徹夜の警備任務だが俺とクズハは調査も進める事になる。
カイルは執事さんに言う。

「朝まで警備を続けつつ調査を進めます、他の被害者や壊されたり
盗まれたりした物が無いか確認をお願いします」
「分かりました、手配致します」
こうして俺たちは警備をしつつ、侵入の犯行現場になってしまった屋敷内の現場検証に追われる事になった。

屋敷の中を捜索する俺たち。
「カイル、そっちはどうだ？」

「何も。怪しい影は見当たらない」
「どこへ逃げたんだ？」
「もう少し捜索しよう」
時間を掛けて屋敷内を捜索する。
魔族と接触したメイドとは別のメイドの証言では、「悲鳴で起きて廊下を見渡したんですが何やら北側へ逃げていく影が見えました」との事。
…
カイルと打ち合わせする。
「トイレで目撃され、北側へ逃走か…」

「兵士たちも来ている。兵士たちの足跡が増える前に北側に痕跡が無いかの確認をした方がいいな」
「じゃあ、そっちは頼む。俺とクズハは引き続き捜索と聞き込みをする」
カイルは「了解」と言い北側へ向かった。
クズハは言う。
「今夜は徹夜だな」
その言葉に俺は「夜更かしは好きじゃないんだけどな」と愚痴を零した。

時刻は明け方。
執事さんから連絡を受ける俺たち。
俺は驚く。
「被害が無い…？」
執事はなんだか申し訳なさそうに答える。
「ええ…」
クズハは問いかける。
「よく確認したのか」
「備品や値打ち物など、リストと突き合わせてみましたが何も取

られていないのですよ」
　俺は続けて聞く。
「じゃあ被害に遭った人物とかは？　その魔物に何かされたりとか」
「そういった類の報告もありません」
「…」
「いやはや何とも…騒ぎ立ててしまって申し訳ありません」
「いえ、こちらも仕事ですので構いません」
そんなやりとりをしてるとメイド長が言う。
「このままお引き留めをするのも気が引けますね。兵士たちの雇

い入れも考えてますし、調査部の方たちの手を煩わせる事でもないのでは？」

そんなセリフを言われた執事は「このあと何事もなければ、そういう対応も考えた方がいいのかもしれませんね」などと言った。

しかし俺たちは言う。

「もう少し調査が必要だと思います、我々は一旦引き上げますが、また夜に来ます」

「左様でございますか…なんだか御足労ばかりで申し訳ありません、

あ、それとこれを。目撃者のメイドと兵士たちで協力して魔族の

似顔絵を作りました、何かの役に立てば」
「ありがとうございます」
こうして俺たちは似顔絵を受け取り詰め所へ戻るのだった。

詰め所で俺はサリエルに報告する。
「そう、大変だったわね」
「資料を整理して状況を確認しなきゃな、それにしても妙な事件だ、魔族の目的も分からない」
俺のそんなセリフにカイルが続けて言う。

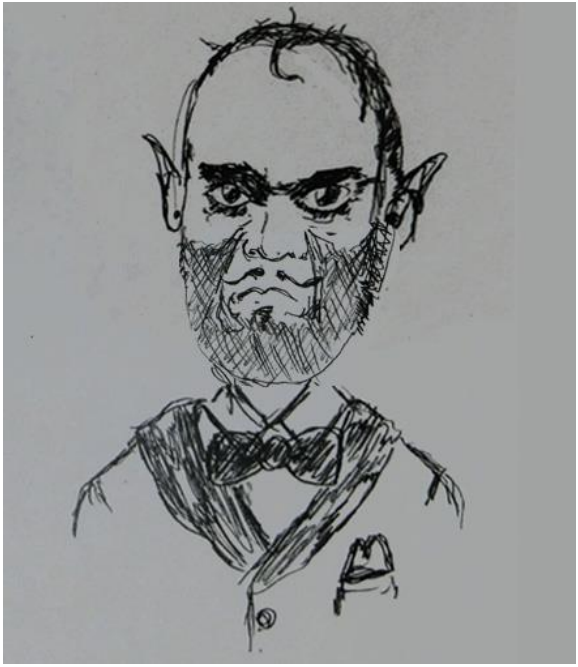
「執事に確認を依頼しているが荒らされた形跡はない」
「ふ～ん…発見が早かったのが幸いしたのかしら。何もしない魔族なんて居る訳ないし」
それに対してカイルが答える。
「トイレには行ってたけどな」
「そう言えばそういう報告が上がってたわね」
クズハが言う。
「随分と悠長な性格の魔族みたいだな」
「それもそうよね…屋敷に侵入して窃盗も攻撃もせず呑気にお手洗いへ…か」

俺は言う。
「それとも、侵入してからすでに時間が経過してて屋敷内で目的の物を探せなかった可能性もある」
サリエルはやや困り顔で返す。
「それでトイレで一服？　肝の据わった魔族ね」
「大泥棒ってのは得てしてそういうものかもしれない」
「う〜ん…分からないわね。そこら辺はまだ調査が必要ね」
「今の所人的被害は無い。ただ念のため魔法や呪いなどで攻撃を受けた人物が居ないかは確認中だ」
サリエルは報告を聞き終えると提案してくる。

「どんな魔族か、相手のイメージが掴めないわね。マリスの所へ行ってみた方がいいかもしれないわ、彼女なら何か有益な情報を知ってるかもしれない」
「分かった」
こうして俺はマリスの研究室へ行く事にした。

別室のマリスの研究室のドアを開け入室し声を掛ける。
「マリス、見てもらいたい物があるんだが」
「なになに？　珍しい証拠品でも見つかった？」
「いや、出没した魔族についてなんだが、まあ珍しいと言えば珍

しいと思う。どんな魔族か知りたいんだ」
言いながらメイドと兵士によって作られた似顔絵を見せる。
マリスは言う。
「なにこれ…」
そこには便座に腰掛ける一人の魔族が描かれていた。
マリスは言う。
「おっさんじゃん」
「おっさんだな」
「ご丁寧にタキシードって」
「珍しいだろ？」



「珍しいけど…手掛かりはこれかあ…」
「どうだ？　分かりそうか？」
「まあ、思い当たるのはベルフェゴール。トイレに座る絵が伝えられている魔族で結構高位魔族よ」
「そうなのか？」
「たしか大罪の怠惰を司る悪魔だとか聞いてるけど、これがそうなのかしら？　おっさんだし」
「偉いおっさんなのかもしれない」
「偉いおっさんの魔族かぁ…」
二人で黙ってしまう。そしてマリスは言う。

「ちょっと調べてみる。古文書とか大罪関係の資料を漁るから少し掛かると思う」
「頼んだ」
こうしてマリスへの依頼を終えた。
みんなの所へ戻った俺はサリエルにマリスとのやりとりを報告する。
サリエルは言う。
「ベルフェゴールかもしれないのね」
「ああ」

「本当ならなんだってあの屋敷なんかに…」
俺とサリエルのやりとりにカイルは言う。
「もう少し突っ込んだ調査が必要だな」
サリエルは今後の方針を言う。
「夜間は兵士増員をするから、巡回警備には行かなくていいわ、今日は夜勤明けだから休息を取ってちょうだい」
「了解」
俺の返答に、だがカイルは付け加える。
「俺はもう少しだけ調べ物をしてくる」
「何か気になるのか？」

「騎士団に話だけ聞いてくる。そしたら俺も休憩を取る」
サリエルはカイルに「無理しないでね」と声を掛けた。
こうして翌日以降、更なる調査と聞き込みをする事になる。

翌日、朝の打ち合わせでカイルが最初の報告をする。
「今日の調査の前にいいか？　昨日、ユリウスの父親の騎士団と魔王軍討伐参加を少し調べた件なんだが」
みんなが注目し、俺は「何か出たのか？」と聞くとカイルは続ける。

「それがな、どうやら関係なさそうだぞ」
その言葉に俺は聞き返す。
「どういう事だ？」
「騎士団の証言なんだが…」
カイルは回想するように話す。

騎士団の一人が言う。
「オルフォード家の当主？　貴族の？　ユリウス様の御父上ですよね？　ええ、魔王軍討伐隊には参加されましたよ。でもご本人に実戦があった訳じゃありません。貴族の当主に危険な任務はさ

せられませんよ。いわゆる名誉騎士、という話です。後方の指揮所の中に幹部として居て頂いただけです。魔族との戦闘自体も小競り合いです。大規模な討伐ではなく、人里に降りてきたはぐれ魔族を山へ追い払うだけの任務ですよ」

俺は言う。

「騎士の称号を維持する為にあつらえられた物だったって訳か」

クズハも同意のようだ。

「形式だけの物だな、よくある事だ」

カイルはまとめるように言う。

「実際の部隊の指揮も軍部の幹部だ。もし魔族が討伐隊を恨むような事があったとしても軍部に対してで、形式上の参加のオルフォード家に報復を考えるような物でもないな。今回の事件の引き金になってるようには見えない」

俺は考えを巡らすように言う。

「別の理由があるのか…はたまた偶然なのか…」

クズハは鋭い目線を細くしながら答える。

「魔族の目的についてもう少し詳しく調べる必要があるな」

俺は思案し言う。

「関係者の聞き取りの幅を広げよう。俺とクズハで屋敷で事情聴

取する、カイル、メイド長とポーラに話を聞いてくれ」
「分かった」
こうして朝からの調査に俺は気合を入れ直すのだった。

カイルは屋敷でキンバリーメイド長に尋ねる。
「お怪我が無いようで安心しました。少しいいですか？　魔族に襲われるような心当たりはあったりしますか？」
その言葉に二人は首を傾げるばかりだ。
「そのような事はありません。私はこのお屋敷に努めて長いです

が地思い当たるような事はございません」
「そうですか…」
空振りに終わったカイルはポーラが何か知ってればいいな、などと期待しながら彼女の方へ向かった。

俺とクズハはメイドや兵士たちに聞き込みする。
彼らの返答は―
「私は最近雇われたのですが、魔族に襲われるなんて事は…」
「怖いですね、平和な町の筈なんですけど…」「町の警備は俺たち兵士の仕事だが、屋敷内まで侵入を許すのは珍しいな、魔族と

の戦闘は大抵は町はずれの畑やダンジョンだ。今回のようなケースはあまり聞かないんだ」

…

あまり手ごたえは無かったが一人のメイドが気になる事を言った。

「…以前の事なんですが、ユリウス様は…」

「ユリウス？　彼になにかあったのか？」

「これはあまりお話出来るような内容ではないんですが、ユリウス様は過去に魔族と…それと、お屋敷への侵入者は以前にも…」

…。

聞き取りを終えた俺とクズハは執事のスロスさんと話す。
「なぜ魔族との接触があった事を黙ってたんです？」
「申し訳ありません…あの事は外部に漏らす訳にはいかないと思い…」
その言葉にクズハは厳しい態度で執事とやりとりする。
「隠し事をされると助けられるものも助けられんぞ。最悪捜査妨害を取られる可能性もある」
執事は暗い顔で返答する。
「反省しております」

「話してもらおうか」
「三年前でしょうか、ユリウス様とメアリー様で保養地を訪れていた時の事です。森の中で魔族と遭遇しました」
厳しい顔で聞き取りを続けるクズハ。
「戦闘になったのか」
「いえ、魔族は怪我をしていたのです」
「怪我？　それでどうしたんだ？　兵士に通報したのか」
「それが…」
ここからは証言に基づく回想だ。

湖畔のほとりに建つ保養地。
そこから少し離れた場所。
やや緑の多い森の中でユリウスはメアリーを庇い剣を抜き言う。
「魔族め！　こんな所で何をしている！　町への侵略か！？　このユリウスの名において成敗してくれる！」
しかし木の根元で座り込む怪我をした魔族いわく、
「お、俺は魔族だがチンケな下っ端だ…いたずらをして人間が嫌な目にあうのを笑う事ぐらいが関の山の雑魚だ。盗んだり殺したりはしない…だからどうか見逃してくれ…助けてくれ…頼む」
「何を言い出すかと思えば…そんな言葉を信じるとでも思ったか」

「嘘じゃない…俺はどこにでも居る低級魔族だ。本当だ。だから頼む、命だけは…」
「…」
「こんなしょうもない小物を殺した所で武勲でも何でもない。どうか頼む…まだ死にたくない…」
「言い訳がましい事を…」
そこまで言うとメアリーがユリウスの袖を引っ張って言う。
「兄さま…」
「メアリー？」
「…」

無言でユリウスを見つめるメアリー。そのメアリーにユリウスは言う。

「こいつは魔族だぞ？」

「でも怪我してる…」

「いつ悪さをするか…」

「助けを求めているわ」

「…お前は甘すぎる…魔族がどんな存在か分かっていない」

「でも、少し可哀想…」

すると魔物は言う。

「へ、へへへ…お嬢ちゃん…優しいな…救いはあるんだと思える

ぜ」

ユリウスは怒る。

「黙れ！　妹に変な気を起こさせるな！」

「お、俺はただ、そっち子の優しさに心を動かされているだけだ…人間も悪い奴ばかりじゃないってな…へへ……な？　頼むよアンタ、ここはどうか剣を治めてくれないだろうか？」

「貴様…」

歯ぎしりするユリウスだがメアリーは懇願の眼差しを向けた。

「くっ…」

ユリウスは剣を下げる。そして悪魔は笑う。

「へへへ…」
「さっさと消えろ」
「この恩は忘れないぜ…」
悪魔は立ち上がるとよろよろと歩く。
そして茂みの奥へと消えていった。
悪魔の顔に浮かんだのは安堵か…それとも…

ここからはユリウスとメアリーに知らない事だが…
その悪魔は呟く。
「とんだ甘ちゃんだ…ぬるい相手で助かったぜ…」

悪魔のささやきが森の中で小さく響いた。

俺とクズハは静かにその話を聞き終えた。そして俺は言う。

「分かりました、その事をもう少し調べてみようと思います」

「申し訳ありませんでした。魔族を見逃し、温情を掛けたと話が広まれば、当家は弱気で小心者という噂が流れかねません」

クズハは厳しい表情のまま言う。

「嘘を吐く事も同じぐらい評判を落とすぞ」

「ごもっともでございます…」

そんな執事さんに俺は少しだけ肩入れして言う。

「まあ、貴族には貴族なりの心配や苦労もあるんでしょう、でも隠し事は無しでお願いします。あと、以前にも侵入者があったという話を聞きましたが」
「はい、三か月ほど前でしょうか、似たような侵入者のような騒ぎがありました。その時は単なる族やコソ泥の類かと大事にはしませんでした」
「そうですか…一応関連があるか調べます」
「分かりました、よろしくお願いします」
こうして俺とクズハは新たな手掛かりを掴んだのかもしれなかった。

カイルはポーラの部屋を訪ねる。
「すみません、調査部の者です」
「はい、今出ます」
「少しいいですか？　魔族が出た件の話なのですが」
カイルは室内へ招かれるが入ったすぐの所で立ち話のように始める。
「あ、簡単な聞き取りですので。何かこの屋敷が魔族に狙われる事に思い当たる事はありませんか？」
「そういった事は何も…まあ、しいて言えば私に関して詰まらな

い噂はありましたけど」
「詰まらない噂？」
「よくある噂です。私が魔族と繋がってる、なんて話です。閉鎖された社会のようなお屋敷の噂をするのが好きな者も居ますので…特に女性は…根も葉もない噂を流されたりしましたが私に限った話ではないので」
「よろしければその辺りの事も含めてお聞きしていいですか？」
その質問にポーラはより暗い表情で答える。
「私は何も悪い事はしていません…ですがいつの間にか私に関する悪い噂が立ち、魔族と繋がってるだの…」

「身に覚えはないんですよね？　抗議はしたんですか？」
「気にはしませんでした。多分魔族に関しての話は私が購入した魔導書関連から尾ひれが付いたのだと思います」
「魔導書？　なぜそんな物を？」
そう尋ねるカイルにポーラは続ける。
「メアリー様の為です。少し変わった物に興味を示される方ですので」
「…たしかに」
「魔法や魔族関連の書物に興味があるようなので、それらしい物を見繕って差し上げたのです」

「それが誤解の引き金だと？」
「大袈裟にしたがる人が居たんだと思います。魔導書は簡単な入門編、
魔族の書物は童話を少しリアルにした程度の、いわゆる子供向けの物です」
「では、魔族との繋がりとかは、勘違いが始まりの噂だと」
「はい…ですので特にこれといった対処はしてません。他の方たちも同様に詰まらない噂を立てられてますので一つ一つに対処するものでもないです」
「他の人たちはどう言った噂を？」

「執事さんは賭け事が好きだとか…メイド長はお金を溜め込んでるだとか…いわゆるメイドさんたちの職場での世間話のようなものです。言い方は悪いですがどこにでもある軽い気持ちの陰口での憂さ晴らしですので」
「気にするほどでもないって事ですか」
「はい…」
「もう一つ、いいですか？　元婚約者のリリアンさんの事ですが」
「…」
ポーラの様子にカイルは言う。
「話しづらそうですね、婚約破棄が原因ですか？」

「リリアン様は少し気分屋な所がある方でしたので…」
「そうなんですか」
「噂の方も盛り上がって…自堕落な性格だの、中には男を連れ込んでるだのというタチの悪い話も」
「そう言えば婚約破棄は悪い噂が立ったからでしたね。それが引き金になったと」
「事実は分かりません。ただ、私はユリウス様とメアリー様の身が心配です」
「分かりました。忙しい所、時間をとらせてしまいましたね、町の警備は続けますが夜間や人目のない所の外出時は注意して下さ

い」
カイルは事情聴取を終えた。
一旦屋敷内の応接間に集まる俺たち。
聞き取りの報告する。
まずは俺から。
「ユリウスは以前魔族と接触して見逃している。三年前に保養地で遭遇している。あと三か月前にも屋敷には侵入者が居たそうだ」
俺は聞き取りの顛末を説明する。
カイルは言う。

「そんな事があったのか…じゃあその魔族絡みなのか」
クズハは「可能性はある」と続ける。
俺は今の所の意見を述べる。
「三年前も三か月前も、そして今回も同じその魔族が関わっているとしても、まだ確証も目的なども分からない、周辺人物の情報と合わせて考えてみたい、カイル、関係者の方はどうだった？」
促されたカイルが続ける。
「それがな、少し難しいんだ。屋敷内には憂さ晴らしの噂がまん延していたそうだ。ポーラが魔族と繋がりあるとか、執事の賭け事好き、メイド長が金に汚い、元婚約者のリリアンに至っては不

真面目で男遊びをしていたという噂まで。それが婚約破棄の原因かは分からない。大抵は他愛ない噂だと思う。ポーラに関してはメアリーの為に購入した子供向けの魔導書や魔物図鑑みたいな物が話を大きくしたらしい」

「可哀そうな話だな」

「ただ、リリアンについては少し話しづらそうにはしていたな」

クズハは言う。

「屋敷内部のゴタゴタか？　貴族の派閥にはよくある話だ」

「リリアンについては少し素行が気になるような話しぶりだった。婚約破棄についてどういう経緯かはもう少し調べた方がいいかも

な」

俺は説明を聞きながら言う。

「関係者の聞き取りは終えたが、どうにも手掛かりが断片的だな」

そんな事を言ってると屋敷内がにわかに騒がしくなった。

メイドたちが「本当なの？」「急いで！」と慌ただしく駆けまわっていた。

俺たちは再び魔族が出たのかと警戒する。

俺はせわしなく動く人影の中に執事のスロスさんを見つけ聞く。

「どうしたんですか？」

「これは…調査官の方…実はユリウス様がお帰りになられたのです」

「ユリウスが⁉」

驚いて聞くと屋敷の奥から気品のある、しかしやや怒りを顕わにした厳しい表情の青年が歩いてきた。

彼は言う。

「スロス、その方たちは？」

「ユリウス様、こちらは調査部の…」

こうして俺たちはオルフォード家の子息との対面を果たしたのだった。

ユリウスは言う。
「屋敷が不届き物に侵入されたと聞いたのでな、急ぎ戻った」
スロスは申し訳無さそうに言う。
「坊ちゃまの手を煩わせる事になり、申し訳ありません。ガリウス様とマイサ様は？」
「父上と母上はまだ外遊だ。残りの出先は見知った顔だからな。俺だけ切り上げて戻った。粗方の話しは聞いた。調査官のタカセ…とクズハ、だったか…世話を掛ける」
ユリウスにそう話掛けられ俺は答える。

「いえ、お屋敷の方々には色々調査に協力して貰って助かってます」
「何でも言ってくれ。屋敷のみならず、町への安全に関わる事だ。出来る事なら可能な限り手を貸す」
「聞き込みなどで情報収集に協力して貰ってます、目下、足取りなどを調べてる最中です」
「被害はないと聞いてるが、油断はできんな。早急な対応をせねば。この町に魔族が幅を利かせる余地など無い事を思い知らせてやる」
「ご立派だと思います、で、早速なのですが見てもらいたい物が」

言いながら魔族の似顔絵を取り出して見せながら聞く。
「この魔族に見覚えは？」
「こいつは…」
ユリウスは顔をしかめながら歯ぎしりするように言う。
「まさか…いや…そんな筈は…」
「見覚えあるんですね」
「…」
わずかの沈黙のあと、怒りをあらわにし言う。
「魔族め…またしても私の目の前に現れるとは…」
「かつて保養地で接触があった魔族ですか？」

「ああ。忌々しい奴だ。見逃してやった恩も忘れこの屋敷に侵入するなど…」

「こいつの名前は調査中ですが可能性としてはベルフェゴール。特徴や能力について調査中です。目的やどういう行動に出るかまだ分かりません。油断はしないでください」

「会ったら今度こそ切り捨ててくれる…」

「私たちは調査と警戒に続けます。何かあったら声を掛けて下さい」

「スロス、この方たちに協力するんだ。これ以上このオルフォード家の名前にケチが付くのは我慢ならん」

「仰せの通りに」
こうして俺とクズハは再び屋敷内での調査を行う事になった。

俺はスロスさんに聞く。
「いくつか気になる点があるんです。用意してもらいたい物があるんですが」
「はい、なんでございましょう？」
「この屋敷の財務記録、それと外出記録を」
「盗品チェックに使うのでしょうか？　それらはメイド長に用意させますので」

「助かります、少し調べ物がありますので一旦引き上げます。何かありましたら詰め所の方へお願いします」
「かしこまりました」

こうして屋敷で必要な資料を集めてから詰め所へ戻り、報告をする。
「ユリウス本人に会えた、騒動を聞いて両親より先に自分だけ帰宅したよ。以前接触した事のある魔族だそうだ」
サリエルは言う。
「やっぱり過去の因縁が絡んでる事件だったのね」

そんな話をしてるとマリスが入って来た。
「みんないい？　こっちも少し報告があるよ」
全員マリスに集中する。
俺は言う。
「助かる。煮詰まってた所だ」
そう言われたマリスが嬉しそうに報告する。
「いくつか分かった事なんだけど、文献にもよるけど色々伝えられてる伝承があって、やっぱり七つの大罪に関わってる、なんて話ね」
俺は「大変じゃないか？　魔王軍の幹部なのか？」と聞いてみ

る。
「う〜ん…別にそういう感じではないみたい。ひとつの説としてでそういう話もあるって感じで」
今度はクズハが聞いてみる。
「危険な存在ではないのか？」
「爵位とか持ってるような、魔界貴族なんて話もないの。だから人間を惨殺してるような伝承も無し」
そんなセリフに今度はカイルが言う。
「だが油断はできんだろう…」
「まあね。人間にちょっかい出して楽しむような描写はあるし」

俺は神妙に聞きながら言う。
「やはり放置する訳にはいかないな…」
クズハも続けて言う。
「この状況でユリウスの家に現れたのは偶然だとは考えられないな…」
カイルがそれに加わるように言う。
「過去にユリウスに見逃されたのをプライドが許さず逆恨みした、と捉える方がいいのか、やや無理があるかもしれんが」
カイルの言葉に俺は答える。
「まあこの資料を見ても陰険な性格ぽいからな、この悪魔。粘着

質な考えはありそうだ」
カイルは言う。
「目的は仕返しか…」
俺は心配になり言う。
「まずいな、すでに侵入までされてるとすると…」
カイルも言う。
「もっと警戒すべきか…」
そんな言葉を言うがクズハが異論を唱えてきた。
「本当に仕返しが目的か？」
唐突なその言葉に俺もカイルも少しだけ黙ってしまいクズハを見

ながら俺が聞く。
「他のケースも考えられるのか？」
だがクズハは冷静に問い返してくる。
「復讐ならベルフェゴールは何をしてたんだ？　侵入までしてたなら仕返しは容易だった筈だ。家屋の中まで入ってお茶でもしていたのか？」
「それは…」
言いよどむ俺になおもクズハは続ける。
「奇妙だ。復讐ならばとっとと手に掛ければいい。それを呑気に発見され、我々に通報される始末。何か気にかかる」

クズハの意見に俺も段々と感化されてくる。
「たしかに…考えてみると少し妙だな…」
そんな意見にカイルが言う。
「恐怖を与える為、という可能性は？」
今度は俺とクズハがカイルに注目する。
「ただ単にメアリーや奥さんを殺したのでは意味がない。魔族が近くに居て、恐怖におののく様をユリウスが聞き、怒りに打ち震えるのを楽しむ為…とか」
そんな言い分だったがクズハは即座に否定する。
「その可能性は低いように思う。悪魔にとって町中で姿を晒して

何もせず、時間が経てば経つほど通報や警戒のリスクは上がる。そして冒険者や怒り心頭のユリウスが帰国して駆け付けて追いかけられるのを許容できるほどの悪魔だとは思えん。理にかなった行動に見えんのだ」

カイルは「そうだな…」と納得し俺も言う。

「何か別の目的があるかもしれない、って事か…」

マリスは自分の明るいペースを崩さず構わずに続ける。

「目的は分からないけどさ、この悪魔についての情報の続きについていい？　能力とかも調べたの」

「分かったのか？　でかした」

「えへへ～。すごいでしょ」
少し照れるようなセリフに聞こえるが自慢気な顔だったので褒めて欲しかったのだ。
上機嫌になった、というか俺が持ち上げた彼女はそのまま続ける。
「こいつの能力は怠惰を司る以外に、好色も司るの」
サリエルは疑問に思いマリスとやりとりする。
「好色？　アスモデウスが司ってたような」
「アスモデウスは色欲。それとはちょっと違う感じでベルフェゴールのはもう少しズレてるというか」

「具体的にはどういう感じなのかしら」
「女性に性的で不道徳な行いをさせたりとかね」
俺は「そんな能力があるのか…」と言いカイルも「厄介そうでもあり、何だかせせっこましい感じもする能力だな」などと感想を述べる。
そんな意見を聞きながらマリスは続ける。
「この能力で何か悪さをしようとしたのかもね～」
俺は言う。
「なるほどな、ようやく相手の素性も見え始めたな」
そう言うとカイルが付け足してくる。

「こっちの調査も少し分かった事がある。屋敷から借りた財務記録などだ。人間の経歴や財政を漁ってみたが、出費が多いな」
「増えてるのか？」
「ああ、依然の婚約後からだ」
クズハは言う。
「結婚式をする予定で準備や贈答品などの出費が嵩んだのか」
「いや、調べると婚約破棄までに結婚式などはまだ予定を組んでいなかった」
サリエルは聞く。
「じゃあ何にお金を使ってるのかしら、そもそもユリウスの両親

は外国に居るのよね」
俺は言う。
「とすると遠征費か？」
その問いにカイル否定を返す。
「その費用でもない。それは別途計上されてる。それ以外で遊行費に近い名目の出費が増加してたんだ」
どれどれ、とみんなが資料を見る。
クズハは言う。
「服飾品に食費」
サリエルも「これは化粧品かしら」と。

俺も「女性が使うお金のように見える」と言うとクズハが続ける。

「メアリーが買い込むような品物には見えないな」

カイルは説明をまとめるように言う。

「どうやら以前の婚約者は金遣いが荒いようだ」

俺は聞いてみる。

「ユリウスは知ってるのか？」

「知らないだろうな、散財を許すような性格に見えないが財務は執事に任せているんだろう」

「事件に関係ありそうだな…そう言えば婚約破棄の原因はリリア

ンの悪い噂だったな、もしかすると…よし、すぐに動こう」
クズハは聞いてくる。
「何か思いついたのか」
「まあ、少しな。ベルフェゴールを探して捕獲しよう。確認したい事があるんだ。カイル、家族や友人の経歴についてもう少し洗ってくれ。俺とクズハは屋敷の周りの捜索だ。巡回を兼ねつつベルフェゴールの居場所を探すんだ」
こうして俺たちは調査の大詰めへと向かうのだった。

翌日、俺たちはベルフェゴールを捕まえる事になる。
クズハの読み通り、付近の空き家に潜伏している所を俺たちに発見、捕獲された。
そして俺は集められた資料から一つの結論を導き出し、ユリウスを人気の無い丘の上まで呼び出したのだった。

丘の上で待つ俺たちの元へユリウスとメアリーが来る。彼は声を掛ける。
「そいつが今回の元凶か？」
俺は答える。

「ああ」
そう答える俺たちの傍には縄で縛られたベルフェゴール。
俺は言う。
「この辺りで捕縛してな。いち早くアンタに連絡した。見覚えあるんだよな？」
「…」
驚きの表情のあと黙ってしまうユリウス。そして少しだけ悩むような素振りを見せた後に言う。
「昔、保養地で会った」
その言葉にクズハが返す。

「そうだ。そして見逃したんだよな？」
「…ああ、まさかもう一度会う事になるとはな」
そう言いながら剣を抜き放つユリウス。そして言う。
「一度ならず二度までも…許さんぞ…魔族め」
だがそんな彼を前に俺は言う。
「まあ待ってくれ。少し話をさせてくれないか？　以前はこいつを見逃したんだろ？　立派だと思う…たとえ魔族相手と言えど倫理観と道徳を持って接したんだろ。当時の関係者から聞いている」
「メアリーにせがまれただけだ。私は討伐するつもりだった」
「妹の頼みを断れない良いお兄ちゃんじゃないか。まあ、それは

今はいい。俺は魔王軍討伐を掲げる軍部でもなければアンタの親でも上官でもないしな。魔族に情けを掛ける事を責める立場じゃない。それよりアンタには少しキツい報告がある」

「…なんだ？　この忌々しい魔族と関わりがある事なのか？」といぶかし気なユリウスに俺は伝える。

「アンタの元婚約者、リリアンはアンタの事を好きではなかったんだ」

「！！」

俺の言葉に驚愕の表情を浮かべるユリウス。そんな彼に俺は今回の調査の経緯を説明する。

「金と名声が目的だ。屋敷の金も相当使いこんでた」
わなわなと震えながら振り絞るように返すユリウス。
「そんな…縁を切ったとは言えアイツが…まさか…」
黙ってしまうユリウスに俺は続ける。
「それでこの悪魔は今回の件に絡んできたんだ」
そう言われてユリウスはゆっくりと質問する。
「なぜ…コイツが…？」
「こいつはアンタに婚約破棄をさせるように仕向けたんだ。メアリーに頼まれてな」
「メアリーが？　どういう事だ？」

「リリアンの目的はオルフォード家の妻という身分を手に入れる事。だがしたたかで中々尻尾を掴ませない手慣れた感じだ。しかもメアリーには余計な事を喋るなと脅しまでしていた。そこでコイツの能力が役に立つ。ベルフェゴールは怠惰を司り、また女性の性的な部分を助長させ不道徳な行為を働かせる能力もある。三か月前に侵入しリリアンに能力を使い怠けた生活をさせ男遊びをさせたんだ」

「な…なんだと…」

「頼まれたとはいえ、コイツはコイツなりに、義理を返そうとしたんだ」

ベルフェゴールは黙ったままだ。
しかしユリウスは激高する。
「それでも！　俺の家と俺の家族だぞ！」
殴り掛からん勢いになったので割って入る準備をするが彼は続ける。
「大体、それならそうと伝えてくれればよかった！　ヒトの家に土足で踏み込んで策を弄するような真似をせずに！」
そんな言葉にベルフェゴールは不貞腐れたような表情のままだったが俺が説明をする。
「それは難しかったんだろうな。　悪魔が貴族の婚約者の悪い話

をしても誰も信じやしない。根拠もない、領主と家族を貶める魔族のホラ話だとな。だからコイツは今回一役買うようなマネに出たという訳さ。メアリーに頼まれてな。今回の侵入はリリアンが荷物を引き払いに来た事で最後の確認をしたんだろう」

そう言うとメアリーは静かに口を開いた。

「リリアンさんは…あの人は…ポーラさんと違って本当は兄さまの事はあんまり好きでもないって分かったから」

「そんな…」

俺は言う。

「よく人を見る事が出来る子なんだな。誰が本当にアンタの事を

思ってるか分かるんだろう」

俺はベルフェゴールの説明を続ける。

「コイツがリリアンを攫ったり殺したりするのは駄目だ。それだとアンタの心はリリアンの方を向いたままだ。だからコイツの能力は今回うってつけだ。リリアンは裏切者で、アンタを愛していたのはポーラだと気付かせる為にな。そして狙い通りにアンタは怠惰な生活になり不貞を働いたリリアンに愛想を尽かした訳だ」

ユリウスは肩を落として言う。

「こんな事が…あるのか…」

俺は問う。

「どうする？　一応被害者だから意見は尊重するけどな」
俺の言葉にユリウスは歯を食いしばり答える。
「まさか、この魔族を許せと言うのか？　見逃せと言うのか…二度までも…このオルフォード家の次期当主が、魔族を」
みな静かにユリウスに注目している。彼は絞り出すように言う。
「理由は分かった…分かったが…納得しろと言うのか…」
思わず剣を振りかぶってしまうユリウス。
ベルフェゴールも汗を掻いて危機を感じている。
俺は静かに見ている。
ユリウスは吠える。

「くそっ！　お前みたいな魔族が！　許せん！　切り捨ててやりたい！」

血走った目で目の前の魔族と己の憤怒に身を焦がすユリウス。

「切り捨てたいがっ…！」

だが静かに見つめるメアリーの目に、ユリウスはかすかな冷静さを取り戻しつつ言う。

「出来ない…」

言いながら剣をゆっくりと下げる。そして言う。

「許せん…だがそれ以上に…何も知らなかった自分が憎い…情けない」

こうしてユリウスはついに道化のような魔族を切り伏せる事を断念したのだった。

俺はベルフェゴールの縄をほどいてやった。そして言う。

「早く行った方がいいぞ。この貴族様の気が変わらない内にな」

ベルフェゴールは言う。

「こんな事をされても私は恩義など感じんぞ。お前なんて馬の糞でも踏め」

「お前こそ犬にでも小便を引っ掛けられろ」

そんなやりとりをした後、ベルフェゴールは駆け出す。

ドスドスと…

なんとも不格好な走り方だ。

俺たちから少し距離を取った所で、振り返り言う。

「二度と私の前に現れるな！」

「こっちのセリフだ！」

俺は頭に来て言い返した。

それから奴は再び走りだそうとする。

それをメアリーが呼び止めた。

「悪魔のおじさん！」

丘の上の悪魔は立ち止まり、再度振り返る。メアリーはいつも

の無表情のまま言う。
「またね」
ベルフェゴールは無言だったしメアリーと同じように無表情だ。
が、たしかに一度、静かに頷く。
そして走りだし、今度こそ、丘の向こうへと消えていった。

詰め所で書類整理をする俺たち。
俺はカイルに聞く。
「で、あの屋敷はどうなったんだ？」
「ユリウスはポーラと婚約したらしい。少ししたら結婚するようだ」
「そりゃ良かった」
「メアリーも元々ポーラに懐いていたらしい。ユリウスとポーラの仲を取り持ちたかった気持ちもあったようだ。それで何とかしようとベルフェゴールに接触をしたという事だ」
その話にクズハが聞く。

「ベルフェゴールを呼べたのは偶然なのか？」
「いや、そうでもないみたいなんだが、よく分からんようだ」
「よく分からない？」
そう聞きかえすクズハにマリスが答える。
「外出記録で分かったんだけど、メアリーはベルフェゴールに最初に出会った場所の保養地へ行って呼びかけたみたい。魔導書を使って魔方陣を作ってね」
その言葉に俺は質問してやりとりをする。
「あの魔導書、そんなに専門的な物だったのか？」
だがマリスは否定する。

「ううん。そんな本格的な物じゃないわよ。町で出回ってる程度の本」
「じゃあなんで？」
「ホントに偶然ベルフェゴールがあそこに居たのか、奇跡が起こったのか…はたまたメアリーにそういう才能があったのか」
「そう言えば何だか浮世離れした雰囲気がある子ではあったな」
「案外将来は有望な召喚士になる素質があるのかもね」
「今度呼び出す時は悪魔じゃなくて天使にでもしてほしいもんだけどな」
そこまで言って後ろから声を掛けられる。

「ホントよ。大変で仕方ないわ」
声の主はサリエルだ。
俺は言う。
「なんだかご機嫌ナナメだな」
「一度捕まえた魔族をそのまま解放なんて、天界の上層部への報告がどれだけ大変か分かる？　それも七つの大罪を司る魔族を」
うっ…
これはまずい流れだ。
俺は下手に出る。
「悪かったって。でも仕方ないだろう」

「仕方ないって何よ」
「あの場でベルフェゴールを切り伏せられる雰囲気じゃないのは分かるだろう」
「ええ、分かるわ。でも上層部への報告で上手く言い訳しないといけない私の苦労も分かってほしいわね」
「仰せの通りです…」
「しっかり仕上げて頂戴よ、報告書。言い訳が出来て辻褄の合う報告書をね」
それだけ言うと部屋から出ていってしまった。
俺は呟やく。

「くそ…」
カイルは「早めに仕上げた方がいいな、報告書」と言う。
「俺たちが悪いのは分かってるけどもうちょい優しさがあってもいいと思うよな」
カイルもため息を吐きつつ言う。
「天界との板挟みなんだろ」
「中間管理職の辛いとこか」
「まあ、それにしてもイライラが募りすぎだとは思うが」
「もう少し部下への愛があってもいいよな」
「まあそうだが、仕事は減らないからな、変わりはしないだろ」

俺は両手を頭の後ろに組み言う。
「サリエルが優しくなる方法…」
「無理な事を考えるより報告書を書くのを進めた方が良くないか？」
「無理でも無いぞ」
「何か手があるのか」
「ベルフェゴールに頼む」
「あいつに？　どうして？」
そう聞くカイルに俺は自信満々で答える。
「あいつの能力でサリエルに男遊びをさせて恋人でも作らせれば

いい。結婚すると丸くなるって言うだろ？」
「天使にも効くのか？　もし出来たとしてもサリエルが恋人を作ってる姿を想像できるか？」
そう聞かれ俺は即答する。
「まるでできない…」
「相手の姿も思い浮かばん」
「俺もだ」
「結婚なんてどれぐらい先だろうな」
「当分は無いか」
ははは…とカイルと二人で笑った。

するとサリエルが出て行った方のドアから本人が戻ってきて怒鳴り声が。

「聞こえてるわよ!!」

しまった…！

まだ居たのか。

俺とカイルはしくじった、と言う顔をするがもう遅い。

結局二人で一生懸命報告書を作成するハメになったのだった。

第三話　終わり

第四話　魔法学園

並べられた机と椅子。
そして前には黒板。
その設備からここが学園である事は説明は要らないと思う。
そして椅子に座る生徒たち。
普通の学校とは少し違うローブか法衣をモチーフにした制服が、ここが普通の学校ではない事を知らせる。
皆まじめに授業を聞いているその様子は中々格式のある場所を想像させる。
黒板にはよく分からない文字列が並び時には数式のようなものまで出てくる。

その様子からここが専門的な学問を教える場所だと知らしめる。
教鞭をとる彼女は言う。
「はい、という訳で魔法の基礎的な要素はここまで」
そう言う彼女の声はよく見知ったものだ。
教壇に立っているのは誰あろう、我らの仲間、マリスだったからだ。
今回の物語はこの学園から始まる。

今から遡る事一日前。

サリエルは詰め所へ来て言う。
「みんな居る？」
俺は答える。
「その呼びかけは事件の匂いがしてきた」
「ご名答。遺体が出たの」
言いながらボードに資料を貼り出して説明する。
「ちょっと厄介な事になるかもしれないわ」
俺たちはボードへ集まり、俺がサリエルとやりとりする。
「どういう事だ？」
「被害者の職業がね…」

言われてみんなで確認する。
…魔法学院教師。
「なるほどな。でもそんなに面倒事か？」
「学校も捜査する事になると思うけど、大手を振って校内で捜査はね」
「生徒たちに影響があると？」
「そ。だから今回の調査は潜入捜査よ」
「つまり教師に転職か」
「魔法学院だからね。人選はおのずと…」
サリエルはマリスを見る。

マリスは驚きながら言う。
「あ、あたし!?」
驚くマリスに俺は言う。
「腕の見せ所だな」
「いや、私は人に物を教えるような立場じゃないんだけどなぁ」
その言葉に俺はマリスに続けて聞く。
「そうなのか？」
「私はもっぱら研究職。外で頑張るタイプじゃないの」
「戦闘とかはした事ないのか？」
「それはあるけど…リュウジの世界でも研究職は外に出ないでし

よ」

「そんな事はない。前線で頑張る研究職だって居る」

「え？　なにそれ…どんな人よ…」

「白衣を着る職業だけどサングラス掛けて銃をぶっぱなしながら悪を成敗する研究員だって居るんだ。マイアミって所にな。たしかハレイショだかフレイショだかって言う名前なんだけど」

「時々リュウジの世界の事が分からなくなるわ…」

「とにかく頑張れよ。俺は影から見守ってる」

だがサリエルは俺にも非情に告げる。

「何言ってんの、貴方もよ」

…
…は？
「聞こえなかった？　貴方もって言ったの」
「なんでだよ、勘弁してくれ。大体俺は魔法は使えないぞ」
「歴史とか普通の科目もあるし新任教師の研修とか教育機関の視察って名目にでもしとくから」
うなだれる俺にクズハは言う。
「頑張れよ。タカセ先生」
くっそ楽しんでそうなクズハの顔を見て俺は悔しがる事しか出来なかった。

静かに流れていく時間。

午前の日差しは校舎を照らし、窓からは陽光が入ってくる。

昔ながらの面影を残しつつも、西洋風の学び舎は少し気品が感じられ、通常の学校とは少し違うような雰囲気が感じられる。

登校している生徒たちは長いローブのような物を着ており、やはりこちらも通常の学校の生徒とは印象が違って見える。

生徒たちのいる教室ではそれを熱心に見ながら読んだり、ノートに取ったりする生徒たち。

先生もそんな生徒たちに時には熱く教鞭を振るう。
用意された教科書などは普通の学舎で使うような教本には見えない。
その本の中身はと言うとやはり普通に読むとよく分からない知識や記述が詰め込まれている。
そして表紙には五芒星が描かれていたりした。
キーンコーン　カーンコーン…
唐突に鳴り響くチャイム。
生徒たちはあるいは伸びをし、あるいはこれからの休憩を楽しみに目を輝かせる。

教壇の教師が声を発する。
「じゃあ、今日の氷魔法はここまで。予習復習を忘れないように」
そう。ここは魔法を学ぶ場所。この国において未来の魔導士たちを育成する最高の学び舎。
王立の教育機関にして魔導士たちの卵を育てる所。
王立魔法学園高等部…正門に掲げらている文字は誇らしげにその存在を主張していた。
束の間の休憩時間。
教室から廊下へ生徒たちが溢れてくる。

短い休憩時間を楽しむように、ドアから出てきてそれぞれの目的を果たすべく行動する。

次の時間の準備をする者、廊下で気の合う者同士で世間話をする者、窓から外を見る者。

そんな雑多な雰囲気で満ちた廊下を俺は歩く。

まだまだここの雰囲気には馴染めない。建物の構造や配置は大まかには把握した。

必要に迫られたというか把握する必要があったのでそこら辺の知識は頭に入れてある。

それは俺が教師であると同時に、それ以外の目的の為でもある。

すれ違う生徒たちが俺の顔を見たりする。
そして距離を取ってから小さい声が聞こえてきた。
「誰かな？　あの人…」
「あんな人居たっけ…」
そんな感想を抱いて口から出てくるのももっともだった。
俺は生徒たちのヒソヒソ声を聞こえないフリをして廊下をすすむ。そして考える。どーしたものか。
建物の構造は把握してきたが雰囲気に馴染むのは時間が掛かる。
とりあえず最初の内は目立たないようにする事に注意しようと思っていたが、そうもいかないみたいだ。

目立たないように、目立たないように…

そうすればするほど、目立ってしまうような気がする。

なんだか何をやっても駄目な気がしてきていっそ投げ出してしまいたくもなるが、冷静に深呼吸して気持ちを切り替える。

職員室を目指しながら情報収集の準備をしなければ。

本来授業なんて見る必要はないのだが、なぜか今回は予定の中に組み込まれていた。

俺はもう一度ため息をついてこれからの事を考える。

とにかく一時間だけやり過ごそう。あとの事はそれからだ。

そう考えながら歩いていると生徒たちが教室へ戻り始めた。休

み時間が残り少ないのだろう。

生徒たちは足早に自分の次の授業の準備に入るべく廊下から姿を消していった。

やがて俺は教師たちの集まる部屋を見つけ、中に入り、学年主任に挨拶した。

職員室での学年主任の先生が言う。

「教育機関のタカセ職員さんでしたっけ？　監督官庁として教師経験見習いが目的でしたよね…お話は聞いてますので、それじゃ、最初の視察は、ええと…ケイネル先生ですね、彼の授業を見て下

さい」

俺はサリエルの言葉を思い出す。

「マリスは特別講師として、リュウジは適当な名目で視察する為に学園に行く手配を取ったから頑張って」

そんなセリフを思い出す。

やれやれと思いながら俺は視察する彼を探した。

そこには、何か周囲とは違う雰囲気をまとった一人の男が居た。

「えっと…ケイネル先生ですよね？」

声を掛けられた男は少しの間のあと、俺の方をゆっくりと目線だけで一瞥した。

鋭い眼光とやや色白の顔。そして長い髪。
その長い髪は少しく癖っ毛のようで女性のように少しだけ緩くウェーブが掛かったような感じであり、それを肩から少し下で結わえていた。だが前髪の方は中分けにしつつもやや伸びたまま手入れはあまりしないようで、もう少しで目が隠れるような長さだ。
そんな風体と鋭い目線からかなり冷たい印象を受ける。
その彼に俺は声を掛け続ける。
「新人のリュウジです。よろしくお願いします。次の授業でケイネル先生の授業を見学させていただきます」
俺のそんな言葉に彼は机の上の書類…だろうか？　何かの紙に

書かれたものを読みながら聞き流すような態度をとる。
返答が来るかとも思ったが、特段何もなかったので俺は続けて言う。
「教室までご一緒させていただいてもいいですか？　それとも何か準備…持っていくような物があれば、言っていただければ取りに行って教室へ運んでおきま」
そこまで言った所で唐突に彼が口を開いた。
「余計な事はするな」
…
ほんの少しだけ、静寂が訪れる。

俺も予想はしていなかった返答に若干たじろんでしまった。
そんな俺の様子など気にした風もなく、やがて彼は言葉を続ける。
「新人に出来る事などない。何も持たず教室へ行っていろ」
…
またしても流れる静寂。
ただそのままにしていても気まずいし、また口を挟んでも面倒な事になりそうなのは雰囲気から容易に予想できたので俺は短く返答する事にした。
「分かりました。教室で待っています」

俺はそう返答して職員室を足早に出る。長居してもいい結果など出ないからだ。

…ふう。

職員室のドアを閉め短くため息をつく。

正直このあともはあ～…などとため息の続きを吐きたい気分だった。

かなり癖の強い先生のようだ、というよりありゃ偏屈なだけじゃないか？

俺はそんな風に思ったが、負の感情を溜め込んでも仕方ないし、なんの解決にもならないと考え直して嫌な気分を心の奥にしまう

事にした。

そしてケイネルに言われた通り、何も持たずに手ぶらで教室を目指す事にした。



ケイネル
厳しい教師



学年主任
リュウジや学園全体を
フォローする教師

静かな廊下を歩き、教室を目指す。
目的の教室を見つけ、中の雰囲気を探ろうとするが、壁一枚を隔てていても分かる。
俺が目指す教室は、静まり返っていた。
…。
教室からの喧騒は聞こえてこない。
まあ…あの先生じゃな…
思いながらドアに手を掛け、静かに開いた。
…
一斉にこちらを向く。

いや…。向いてはいない。生徒たちは視線だけをこちらに向けていた。

そして安堵の表情を見せた。

俺はドア横に立ち、声を出す。

「はじめまして。教育機関の新人のタカセだ。色々な学校の授業を見学をしている。ケイネル先生は後から来る」

その言葉を聞いた生徒たちは落胆と怨嗟の混じった感情をこれでもかと噴出させた。

すまないな…

俺は心の中で生徒たちに謝罪する。

生徒たちはケイネル先生は休みで、俺が代理だとでも数舜でも期待したのだろう。

だが俺の言葉は彼らの期待を裏切り、降って湧いてくる希望など無いと打ち据えたのだ。

哀れ、生徒たちは暗い現実へと戻されたのだ。

生徒にも、先生にも厳しい先生。

彼の噂は生徒の無言の態度で確かであると確信したのだった。

…

ほどなくして、教室のドアが開く。

暗い雰囲気と鋭い眼差しの教諭が静かに入ってくる。

俺はその場で立ったまま。そして彼は俺に一瞥すらしない。まるで俺なんか居ないみたいだ。

少しぐらい話をしても良さそうなものなのに、目もくれない。

俺は置物か？

俺の感想をよそに、彼はいつもそうなのだと言わんばかりに授業を始めるようだった。

生徒たちは暗い顔のままだ。

そしてケイネルは言葉を発する。

「授業だ。だがその前に前回の課題だ」

生徒たちの顔をより一層暗くなったのがはっきり分かった。

「前回のグループごとの代表は作成した課題を提出しろ」
そう言われて数名の生徒が課題、と言われたレポート？　だろうか…束ねられた紙を提出する。
恐らく生徒たちは前回の授業でグループに分かれて課題を出され、結果のレポートをグループのリーダーがまとめたのだろう。
ケイネルはそれを受け取り、すばやく、流すようにパラパラとめくる。すると、最後の一つを確認した所で彼の表情が変わった。
眉間に皺を寄せ、提出した生徒を睨みつける。
うわぁ…
俺は心の中で呻く。

もう何が起こるか容易に想像できるからだ。そしてケイネルは厳しい先生のお決まりの行動をする。

「なんだこれは」

声の大きさこそそこまでではない。だがその風体と雰囲気がケイネルの迫力をより一層大きくしていた。

「内容も薄ければまとまりもない…こんなものを作るのにどれほど時間を掛けたのだ？　いや…時間を掛けずにいいかげんな内容のその場しのぎのレポートでも通ると思ったのか？」

そんな言葉を投げかけられた生徒、レポートを渡した代表リーダーはシュンとなってしまう。

「単なる記述の羅列すらできんのか？　いや、記述の羅列でも、侮るなといつも言っている。紙の上の言葉すらまともに出来ないのに、意識を伴った魔法の言葉を操れるなどという事はないのだ！」

重苦しい雰囲気が教室を包む。だがケイネルはお構いなしだ。

「罰として新たな課題を作る。内容は追って知らせる。今日は今日の必要な授業をする」

…

のっけからの暗い雰囲気に本当に面を食らってしまう。

厳しいとは聞いていたがここまでとは。生徒たちは毎回これに

耐えているのだろうか。
始まりからキツイ一発をお見舞いされてしまって授業に身が入らないのではないのだろうか？
そんな心配をしたが…仕方のない事だった。
っていうかどうしようもない。
俺は一介の新人教師だ。出来る事なんてない。
今はただこの風変わりな教師の機嫌を損ねないように静かにしている事しかできない。
それは生徒たちも同じようで、俺と生徒たちはお互いがまるでここに居ないように気配を押し殺していた。

ケイネルはそんな事お構いなしだ。そして言う。
「教科書の五十六ページだ」
短くそう言うと淡々と授業を始める。
ツラツラと…
昼のランチの後の静かな授業の時間が過ぎていく。
生徒たちは食後で眠くなる時間だが、抑揚のない声で進む授業は結構、来るものがあるだろう。
いやしかしそんな余裕はないか。
居眠りでもしたらどんな未来が待っているか。
周囲に立ち込める緊張感の中、授業は進んでいった。

…

キーンコーンカーンコーン…

鐘が鳴り響く。

待ちにまった授業終了の合図だ。生徒たちに幸せを知らせる鐘の音。

ケイネルは音を聞くと静かに授業を終える。タイミングはぴったり図ったように、

キリのいい所だった。

彼は自分の教科書を静かに閉め、言う。

「では今日はここまでだ」

だが生徒たちの緊張はまだ解けてはいない。
ケイネルの言葉の続きが気になるからだ。
生徒たちの視線を受けながらケイネルは言う。
「課題についてはまた後日知らせる」
短くそれだけ言う。するとスタスタと歩いてドアを開け、教室から出て行ってしまった。
俺は少ししてから無言で教室から出る事にした。
重苦しい雰囲気から解放された生徒たちに何か声を掛けるべきかと思ったが、余計な事だと思い直し、何もせずにドアから出たのだった。

うららかな昼下がり。
学院の中庭には陽が降り注ぎ、おだやかなランチタイムが過ぎていく。
勉学に励んだ生徒たちも今はその心を休め英気を養う時間だ。
そして栄養摂取の時間でもある。
所々でお弁当だろうか？お昼のご飯を広げる生徒たちが見れる。
あるいはサンドウィッチか、あるいは食べ物は全て済ませて、
食後の飲み物を外の空気と共に味わう時間だ、とでもいわんばか

りに各々の余暇を楽しんでいる。
のんびりしてていい雰囲気だな…
そんな感想を抱きつつ中庭を歩く。
そんな中、暇そうな生徒を見つけて少し話を聞く事にした。
「ごめん、ちょっといいか？」
「はい？」
呼び止められた生徒は「何ですか？」と聞いてくる。
俺は欠勤している教師と前に聞いた学院の噂について聞いてみる事にした。
「マシュー先生の事についてなんだが」

「あ、なんか最近来てないって話ですよね」

…。

やはり話は出回っている。しかし死亡ではなく欠勤という形になっているようだった。そして彼は続ける。

「なんだかお休みしているようで…」

何か情報はないかと聞いてみたがこの口ぶりだと伝聞以上の事は聞いていないか…

そんな事を思いながら続けて聞いてみる。

「マシュー先生は黒魔法を教えていたって話だけど、間違いないか？」

「はい。特段他の先生とは変わらない、黒魔法を教えてくれる先生の内の一人ですよ」
「最近何か変わった事はなかったか？」
「う～ん…特には」
考え込むような素振りをして答えてくれるがやはり何も思い浮かばないようだ。
「少し疲れているような感じがする時はありましたが、元からそんなに元気一杯、みたいな先生ではなかったので」
そんな風に言いながらマイルズについての印象を教えてくれる生徒。

「あ、でも別に嫌な先生ではないですよ。普通に接して、淡々としながらも必要なフォローはしてくれるタイプですよ」
「嫌われてる、って訳じゃなかったって事か」
「むしろ好かれている方じゃないですかね」
そう言いながら付け加える。
「ケイネル先生とかの方が…あ、これはその…」
生徒がかしこまってしまったので俺はフォローする。
「いいんだ。俺も見てきたよ。ケイネル先生は…なんていうか…固いよな」
「ええ、ほんとにもう…」

「ははは、まあ、ああいうタイプはどこにでも居るから」
「そうですよね」
そんな普通のやりとりをする。
先生についての情報はこんな所か…。そう思いもう一つの方の聞きたいことについて確認をとってみる。
「あと悪い…もし知ってればでいいんだが、この学院について何か話題になってる事やの噂なんかがあれば聞きたいんだ」
そう聞かれた生徒は一瞬だけ悩むような素振りを見せる。
別に隠し事、というよりそんな事あったっけ?と考えを巡らすように。

そしてすぐに答えてくれる。
「学院の噂…？ああ、あの噂の事ですか」
そう言いながら続けてくれる。
「なんだか夜に化け物が出る、とかなんとかの話ですよね」
「そんな噂があるのか」
「なんだか見た生徒が居るとか居ないとか…悪魔で噂ですけど」
「他に何か知らないか？　見た生徒の事とか？」
そう聞くと「う〜ん…」と困ったように答える。
「そう言われても…」
「有名な噂なんだろ？」

「いや…そういう訳じゃないと思いますよ」
「そうなのか？」
意外な答えが返ってきて俺は聞き返してしまう。俺はてっきりこの噂で持ち切り、みたいな感じを予想していたのだ。
だがどうやらそんな感じではないらしい。生徒は落ち着いた感じで答えてくれる。
「一部の生徒で盛り上がってる感じですね。よくありますよね。そういう怪談」
「どんな感じなんだ？」
「なんでも夜に見かけたとか」

「出所とかはっきりしてないって事か…？」
「初めは忘れ物をしたかも、みたいな感じで夜に教室に戻った生徒が見た、とかそんな感じだったと思います」
「夜だけっていう所はそこから来たのか」
「はい…さすがに昼間から見たとかいう話はないです…ただ」
「ただ…？」
「最近は昼でも声だけ聞いた、みたいな話は出てますけど、正直ホントかどうかは分かりません」
「…」
「この手の話はどんどん面白おかしく広がりますから…こういう

所では」

分かりますよね？　みたいな感じで言う生徒。

たしかに、学校の怪談、なんて定番中の定番だ。生徒間で盛り上がってどんどん話が大きくなる。

「ホントかどうか分らない部分がどんどん付け足されていく、って事か…」

「そうです。中には明らかに尾ヒレが付いたようなのとか、夜な夜な人を食べては大きくなって、今では学院より大きくなったとかそんな話まであります。学院より大きくなったら隠れてないのに」

「もっともだな」
「なので、一部では盛がってますが、結構冷静ですよ」
「そうなのか…」
「はい、僕はまだ低学年ですし、そういう噂の一部を聞かされてるだけかもしれません。案外上級生は事のつまらない真相を知ってたりするかもしれないですね。召喚魔法の実験を見た生徒が話を大きくしただけとか」
「一応聞くけど、どの辺りで見た、とかそういう情報はあるか？」
「ああ…それなら…地下の物置への入り口になる通路とか、あとは実習棟とかですね」

「実習棟…魔法の練習とかする所か」
「はい。授業が終われば人気がない所ですから」
「噂も立ちやすい場所って事か。ありがとう」
「地下物置は学院、実習棟は向こうです」
そう言いながらそれぞれのある方を指差して教えてくれた。
「後で行ってみるか…すまなかったな」
「いえいえ、では」
そう言って挨拶をする生徒を見送り、俺は聞き込みを終えた。
一応他の生徒にも数人、声を掛けてみたが、返ってくるのは似たような回答ばかりだった。

「まあ…そんなもんか」

俺は独り言を言いながら次の行動を考える。

だがこれから先の事を続けるより腹も減ってきたし何より昼休みだ。

ここで何かを食わねば、と考えた。

昼飯抜きでは午後の授業に差し障る。

それに学食か購買部か、どんなものか見てみたい気もあった。

そんな考えになった俺は食堂へと移った。

ガヤガヤと…

喧騒が辺りを包む。
食事と共にお喋りに興じる生徒たち。その中を進んでいく。
一般的な食堂と変わりはなく、一番奥で注文して受け取る形だ。
幾ばくかの生徒が俺の姿を物珍しく見ていたがそれもあまり気にはならなかった。
注文待ちの列はなく、食堂が落ち着いていたのは先に中庭で情報収集をしたからだろう。
配膳のピークは過ぎて中には食べ終わる生徒もいた。
ゴッタ返した中では身動きがとりづらいのでこの状況には少し感謝する。

配膳口の前でメニューを眺めながらどれにするか悩む。学食だからだろうか、そこまで豪華なメニューはない。

パンやサンドウィッチ、スパゲッティみたいなものが並んでいた。

さすがに焼き魚定食など望んでもある筈もなくこんなもんか…と思いながらもスパゲティのミートソースがあったのでそれを頼む。

そして教師用、と書かれた別室の方へ向かう。

教師と生徒が一緒でコミュニケーションを取るのも悪くないと思うが、無用な気遣いをさせるのも悪いだろう、そんな考えから

だろう。
俺は自分の世界の時の事を思い出す。
そう言えば中学は昼飯も先生と一緒だったけど高校は別だったな…。
ここは一緒の施設内に中等部と高等部があるけども自分の世界の高校準拠かな…そんな事を思いながら席についた。
そこでスパゲティを食べつつ思考を巡らせていると声を掛けられた。
「どうも、ここ、いいですか？」
俺は声の方を見るとそこには女性が一人立っていた。

ショートヘアのような短い髪に整った服装。ここの先生だろう。
俺は彼女に答える。
「どうぞ」
「ありがとう。初めまして、ですね。ジェシーと言います」
人当たりのいい笑顔を浮かべながらそう自己紹介した彼女は席に着いた。おぼんに載ったサンドウィッチの皿を静かに置きながら。
俺はそれを見つつ、名乗られたのでこっちも笑顔で名乗る事にする。
「タカセだ。こちらこそ、よろしく」

自己紹介する俺に彼女は柔らかい笑顔を浮かべる。
「緊張しました？　私も最初は…あ、まだそんな昔じゃない話ですけど」
「ここは長い訳じゃないのか」
「ええ。三年目です。やんちゃな生徒に苦労してる所ですよ」
「それは大変だ」
「まあ、慣れですけどね。この前も男子生徒が…」
「ははは…若い先生だから好かれてるんですよ」
「そうだといいんですけど…ふふふ」
とりとめのない会話。

とりあえずは世間話でもしてみる。色々聞きたいところだがいきなり踏み込んだ事を聞いても怪しまれるだろう。ここは流れに任せてみる。

適当に相槌を打ちつつ、有用な情報が出てくればめっけもの、程度でいい。

俺はそんな事を考えながら相手とお喋りに興じた。

色々な話を聞きながら、彼女は午後の授業について話をしてきた。

「まだ授業を見学してる段階ですよね？」

「ああ。君の授業も見学したいな。何の授業を持っているんだ？」

「私ですか？普通に黒魔法ですよ。ここは大体黒魔法ですからね」
「そうなのか？」
俺は少し疑問に思って聞いてみる。
「はい。まあ一番需要がある、っていう理由もありますけど。他にも色々と。
召喚魔法とかは高等すぎますし、それ以外にも理由はあったりするんですが…」
彼女は少しだけ悩むような表情をしたがそれはすぐに消えて話の続きをした。
「まあ、そこら辺の事はそのうち分かると思いますよ」

「そうなのか…」
「そうです。私の授業の時にでもお話出来ればと思いますが、今日は違う先生の見学ですよね。
私の所には見学の話は来ていませんし」
「そうみたいだな…午前の授業は…たしかケイネル先生だったかな、その人の授業を見させて貰った」
「え？」
彼女は唐突に、トーンの変わった声を上げた。
なんだろう？何か変な事を言っただろうか？
俺はそんな風に思ったが、彼女は小さく呟くように話の続きをし

た。
「あ～…ケイネル先生ですか…」
そんな様子の彼女に俺は食事の手を止め質問をしてみる。
「何かあるのか？」
すると彼女は少しだけ困った顔をしながら答える。
「ん～…別に何も…特には…」
特には、と言うが何もないようには聞こえない。
そして彼女は続ける。
「ただ少し…私からは…その…なんですが…ケイネル先生は大先輩ですけど、少し癖が強くて…」

「…」
「いや、悪い先生じゃないんですけどね…」
「…」
「少し、少しだけ厳しいと言うか…」
「生徒に？」
「生徒に…」
「新しい先生にも？」
「…新しい先生にも…」
…。
彼女は笑っているような、困っているような、なんとも複雑な

表情を見せた。
そして言う。
「大変でしたよね…」
「まあ、かなり強烈な先生ではあったかな」
「あはは…」
なんだか少し暗い雰囲気になったので俺は明るく振舞ってみる。
「大丈夫さ。まだ初日だ。それに明日以降は君の授業の見学もあるかもしれない」
「そ、そうですよね！」
気分を持ち直したのか、パアッと笑顔に戻り言う彼女。

「私の授業の見学があれば、頑張ります！」
「気合十分だな」
「私も三年目として、少し頑張ろうかな、なんて思ったりしてて……えへへ…」
可愛い顔を見せながら笑う彼女。俺も軽く返答を返す。
「明日以降に期待だな。その時はよろしく頼むよ」
「はい！　任せて下さい！」
元気いっぱいに返事する彼女。その後は明るい世間話をして時間が過ぎた。

…。

疲れた。

あれからも授業や学校内を気を取り直して見学を続けた。

そして、それ以降はつつがなく見学は終わり、一日を終えたのだった。

職員室で荷物をまとめる。今日使った物などをまとめつつ、これからどうするか考える。

情報はまだ集めたい。

授業を見学する限りでは特段異常はなかった。普通の魔法学院の授業のようだった。普通の魔法学院に行った事もないくせに、

というかそもそも俺は本来はこの世界の住人ですらないので普通の魔法学院の授業と断言するのもおかしいものだが、何か変な授業をしていた、とかそういう感じではなかった。

ケイネルの授業はアレだったが、まあああいうもんかな、などと思ってしまう。

私生活まで何もないとは断言できないが。

そんな事を考えながら帰り支度をしていると声を掛けられた。

「お疲れ様」

そこには昼のランチを共にした女性が笑顔で立っていた。すなわち、声の主はジェシーだった。

そしてその隣には男性が。
年はジェシーより上。三十歳にはいかないだろうか？
若くても中堅のような感じで学校には慣れていそうだ。
短い髪とジェシーに負けず、人の良さそうな人相をしている。
こういうのを少しだけ童顔と言うのだろうか？
その男性は軽く手を挙げ挨拶するように言ってくる。
「はじめまして。ライコスです」
そんな風に言われて俺も挨拶する。
「こちらこそ、はじめまして。タカセです」
かしこまって挨拶するが、彼は照れたような顔をする。新人な

のはこっちの方なのに。
そして言う。
「そんな、もっとフランクでいいですよ。頼れる先生を目指してますから」
彼のセリフにジェシーが言う。
「結構先輩なんですよ」
俺は彼女に「そうなのか？」と聞くと「ええ」と答える。
ライコスはそんなやりとりを眺めながら言う。
「こんな風体ですが、実はそこそこ年を取ってまして…」
そこまで言うとジェシーが耳打ちするように言う。

「今年で三十六」

ちなみに全然普通の声で耳打ちになってないが。

俺は驚いた。全然見えない。。

彼はまたしてもやや照れた顔をする。でも納得だ。外見が実年齢と大分離れているからだろう。

そして彼は言う。

「ははは…自分としてはもっと渋くなりたいんですけどね」

そんな彼と俺は会話する。

「二十五歳でも通用しますね、お世辞ではなく」

「女性なら嬉しいセリフですね」



ジェシー
教師三年目
リュウジを気に
かけてくれる



ライコス
先輩教師
童顔だが年齢は高い

「いやいや、男でも若く見えるのはいい事ですよ」
「そういうもんかなぁ」
「ああ」
そこまで言うとジェシーも言う。
「ほんと、羨ましい」
そんな会話をして三人で笑った。
…
しばし穏やかに笑い合った後…
「それでタカセさん、どうだった？」
ジェシーが聞いてきた。

「ん～…疲れたな」
ライコスもジェシーに続いて聞いてくる。
「大変だったよね」
「そうよ。ケイネル先生の授業を見学したのよ？　ね？　タカセさん」
そんな問いかけに俺は少しだけ肩をすくめてみせて言う。
「あ～…あそこは神経がすり減った」
「だろうね」とライコスは困ったような感じで笑いながら相槌を打った。
そこからジェシーが言う。俺は彼女との会話に花を咲かせる。

「私も最初はね…ホント大変だった。だから今日は貴方を誘おうと思って。ライコス先生と」
「誘う？」
「初日お疲れさまの食事。軽く。どう？」
「それはいいな」
「でしょ？　色々感想や言いたい事、聞きたい事があると思って」
「素晴らしい提案だ」
「なら決まりね」
そこまで言ってライコスの方を見る。
「お誘いを受けてくれてありがとう」

俺は席を離れる。
「じゃあ早速行くか」
「案内するわ」
ライコスは言う。
「美味しい料理と飲み物があるお店があるんだ。気に入ってくれると思うよ」
「楽しみだ」
こうして俺たちは明るく職員室を出る。
雑談をしながら廊下を歩き、校舎の出口をくぐり、町へと繰り出す。

外は日が落ち始める時間。すなわち大人の時間だ。
労働の義務から解放された大人たちが集う第二の時間だ。
我ながら何を言っているか訳が分からないが、とにかくそんな時間だ。学院から少し歩き、帰りの時間帯。夕食の準備などをする家々が立ち並ぶ町の中の道を進みながら一軒の店の前まで来る。
酒場のようなマークを掲げているが、ドアの脇には少しだけお洒落な立て看板、それにお勧めのメニューなんかが可愛く描かれている。
「ここよ」
ジェシーはそう言いながら店のドアを開ける。

「ささ、入って入って」
俺たちは彼女の声掛け通り、店内へと入る。
一番年上なのはライコスの筈だが、ジェシーの行動力が旺盛なのか、どうやらお店についてのリーダーシップは彼女の方が向いているらしかった。
俺は店内を進みながら言う。
「雰囲気の良い店だな」
普段のギルドのような所でもなく、酒場と言うほどでもない。
お酒と料理の専門店だ。
畏まった格調を求める場所ではないが、そこそこお洒落で女性

でも気兼ねなく入れるお店。
そんな店の店内の感想を俺が言ったのだ。
ジェシーはそれを聞き、まるで自分が褒められたように答えた。
「でしょ？　もちろん、味も保証するわ」
「僕の方からもここはお勧めだと言ってあげられる」
やはり笑顔でライコスが言った。
二人の言葉で俺は「それは楽しみだな」と返す。
「ここでいいわよね」
言いながら一つのテーブルの前に立ち、「ささ」と着席を促される。

そして「今日はあなたが主賓。遠慮せず」と可愛く言ってくれた。

「お言葉に甘えて」

笑顔で返す。

そして着席し、ライコスは「はい。どれも美味しいよ」と料理の載っているメニュー表を渡してくれた。

そしてみんなで料理選びに入る。

「まずは飲み物だな…俺は…」

「とりあえずお酒よね」

「僕のお勧めの料理は…」

それぞれが注文に考えを巡らし、〝これ〟だというチョイスが決まる。店員さんにそれを告げ、やがて飲み物と料理が運ばれてきた。

俺が「それじゃあ…」と音頭を取り、お決まりの食事の開始の合図をすることにする。

コップを持ち、みんなで…

「乾杯！」

こうして俺の初日のご苦労さん会？　とでも言うのだろうか。ささやかな歓迎会が始まった。

「で、どうだったかしら？　初日は」
「疲れたけど楽しかったな」
「一番印象だったのはなんだい？」
「食堂のスパゲティミートソースの味かな」
「嘘！？　そんな事？」
「ははは…冗談だよ」
「もう！　タカセさんったら！」
ははははは…
…料理をつつきながら笑い合う。
二人は俺に初日の感想を聞きつつ、今日という日を乗り越えた

事をお祝いしてくれる。
料理もたしかにお勧めするよう美味い。
食欲をそそるいい香りの肉、普通の豚肉だろうか？だが柔らかく調理され程よい味付けのソレを口に運びながら今日の事を思い返す。
朝の景色、広い入り口…生徒たちが溢れる廊下…優しい雰囲気の中庭…
自然と明るい気持ちになり会話も弾む。するとその内、俺自身の話になった。
ジェシーが俺に聞く。

「所でタカセさん、うちの学院にはどうやって紹介されたの？」
結構核心、というか肝の部分を聞いてくる。
まあ今回の話の中心になる部分だが、まだ全部は話せないのだ。
なので掻い摘んで話せる部分だけ話す事にする。
「いやあ、まあ昔のツテでね」
「ふ～ん…結構いい所の人脈でもあるの？」
「そんなもんでもないけど…」
俺の話にライコスも入ってくる。
「なんでも魔法は使えないって聞いてるけど本当なのかい？」
ジェシーは「えっ？」と驚いていた。

俺はここで嘘を吐いても仕方ないのでこの質問に関しては素直に答える。
「ああ。魔法の方は駄目だな」
「少しも？」
ジェシーがなお聞いてくるので言う。
「出来ない。少なくとも生徒に教えるような身分じゃないな」
「ええ～…」と。もう一度驚く二人。
そして二人は当然の疑問を口にする。
「じゃあなんでうちに？」
「さあ…なんでだろうな。色々思いつく考えはある」

「何々？　なにかしらそれ」
「例えば、これから先、魔法以外の事も教える準備なんじゃないか？
例えば冒険の基礎知識や国の歴史とか」
「…」
黙って聞いている二人。
「ほかには魔法は使えなくても魔道具についてはソコソコの扱いと人脈がある。科目にそういうのを増やすとか」
もちろんでまかせだ。
魔道具に精通なんてしてないしそんな人脈もない。ただ適当な

理由を付けてみる。
「あとは…そうだな、新人の一環で魔法学院を見学させて、このあと普通の学校も見学させるつもりなのかもな。両方学ばせて、違いを実体験させるとか」
俺の話にライコスが言う。
「両方経験させる…色々な教育機関を知っておくって事は、君は将来この国の教育大臣になる候補だったりするのかな？」
「すごいわね！」
突飛な話になったので笑いながら否定する事にする。
「まさか。俺はそんなに偉くないよ。どこから見ても普通の新人

だろ？」
「ふふふ。そうね」
三人で笑い合う。
そしてライコスが言う。
「でもそうすると、ホントなぜなんだろうね。僕はてっきり…」
ライコスのてっきり、の部分に反応する。やっとお目当ての話題にありつけそうだった。
俺はややわざとらしく聞いてみる。
「てっきり…？」
すると二人は顔を見合わせる。なので促すように続けて言う。

「俺も少しだけ自分が派遣される事になった噂ぐらいは聞いている。教えてくれないか？」

俺の言葉に二人は悩んだがやがて構わないか、と決めたようで話してくれる。

ジェシーが口を開いた。

「あのね…大きな声じゃ言えないけど、貴方はある教師の代わりなのかもしれないの」

「ある教師？」

ライコスは答える。

「そう。マシュー先生っていう方が居たんだけど、急に亡くな

ってしまって。だからもしかしてって思ってのさ」
それは俺が最も聞きたい情報だった。
それとなく、だが興味があるように聞いてみる。適当な勘でも混ぜながら聞けば、そう疑われはしないだろう。
「体調でも崩していたのか？」
俺の問いにジェシーが答える。
「ん～…体調不良とかそういうのではないみたい…と思う…」
「みたい？　思う？」
「よく分からないの。具合が悪そうには見えなかったし」
「よく分からないって…教師間でも何か情報がないのか？」

俺がそう言うとライコスが答える。
「独身でね。家族から居ないから…聞こうとしても」
「自宅には？　何も聞けないのか？」
「うん」消沈して答えるジェシー。
「うん…って…不審死かもしれないのか？　大変だな」
俺がそう言うとライコスは困ったように言う。
「なんにしても情報が少なくて」
「何かほかに情報は？」
「情報って言われても…」
「なんでもいいんだ。その先生に関する事でも、学院周りの事で

も気になる事はないのか？」
二人は少しだけ考える風にするとジェシーから言われる。
「気になる事って言われても…」
思いつかないような、言いづらいような、そんな雰囲気になるが俺は辛抱して待つ。すると彼女は言う。
「マシュー先生はケイネル先生と少し確執があったりするけど」
「確執…？」
「ええ…」
言いながらジェシーはライコスの方を見る。
するとライコスは目で合図、というか頷いて彼女にサインを送

る。そして言う。
「まあ、話してもいいんじゃないかな」
ライコスにそう言われたジェシーは説明の続きを始めた。
「ちょっと事情があってね…学園では魔物を扱ったりもするんだけどそういう教育課程について教員同士でも意見が違ったりしてね」
「ふ〜ん…そういう事なのか」
俺がそう言うとライコスが安心させようとしたのか言ってくる。
「まあ魔法学園って特性上、色々他と違う事情や問題もあるって事なんだよ」

「たしかに、普通の学校とは違うもんな」
ジェシーは少しだけ困ったように続ける。
「まあ、詳しい話は知らないし、教師全員が同じ考えとは限らないから、よくある話なのかもしれないけど」
俺は言われて納得した。
まあ、噂に関してはこの程度の話しかまだ分からないって感じなんだろう。
俺の様子を察してか、ジェシーが言ってくる。
「あ、先生同士のいざこざの話なんてごめんなさい。余計な心配させちゃったわよね。来ていきなり変な話聞いちゃったから怖く

なっちゃった？」
「いやそんな事はないが…」
「ならいいけど…せっかく来た新しい人に逃げられたら困っちゃう」
そんな言い分にライコスは笑いながら言う。
「君の大切な後輩だもんね」
「そうそう…って！　そーじゃないけど！」
俺も笑いながら言う。
「俺は可愛い後輩か…せいぜい頼る事にするよ」
「そうするといいよ。彼女は後輩が出来るのを楽しみにしていた

からね」
「ライコス先生！　ちょっと！」
「ははは」
俺たちは笑い合う。そしてジェシーは言う。
「まあそんな感じでタカセさん、今貴方の疑問に答えられてるか分からないけど心配しないで。噂は問題があるようなら学園でも調べるだろうし、マシュー先生の件はもし気になるならギルドで情報収集も出来るかもしれないわ」
「ギルドで？」
「ええ。だってもし何かの事件に巻き込まれてるなら、マシュー

先生の関連で依頼が来てるかもしれないでしょ？」
「ああ、そう言えばそうだな」
「他にもギルドは情報が集まる所だし」
…。
たしかに。
俺は二人と話をしつつ思考を巡らせる。
マシューが何らかの問題を起こしていたならギルドにそれにともなう依頼が出ているかもしれない。
ギルドの方へも行ってみるか…
俺はそんな事を考える。

「…カセ先生　…タカセ先生ってば！　聞いてる？　私の話！」
「ああ！　ごめん。聞いてるよ」
ジェシーに突っ込まれる。
いささか考えにハマリすぎた。適当に相槌を返す事にする。
「学食のお勧めメニューの話しだったっけ」
「そんな話してない！」
怒りだすジェシーだがライコスは笑いながら言う。
「でもジェシーは美味しい食べ物の話好きですよね」
「そうだけど！」
俺も話に乗って聞いてみる。

「そうなのか。いいよな。食べ歩きとか」
「ええ、まあ。この前も美味しいスイーツが…」
「休日は食べ歩きか。女性らしくていいじゃないか」
「美味しい物を食べると疲れも飛んでいくわ。ねえ、今度一緒にどう？」
「俺は甘いものはそこまで」
「食べないの？」
「嫌いじゃないけど」
「じゃあいいじゃない」
捲くし立てられそうになるがライコスが宥める。

「こらこらジェシー。タカセ先生が困ってるよ」
「あ…いけない。私ったら…」
俺は笑顔で答える。
「ジェシーは意外に熱血先生なのかもしれないな。押しが強い」
「僕もそう思うよ」
「もう！　二人とも！」
ははは…
語らいの時間は楽しく過ぎていった。

「じゃあね、タカセ先生」
ジェシーは明るく手を振る。
ライコスも笑顔で別れを告げる。
二人で楽しく食事をした俺は情報を集めつつ学院についての話を聞いて会食を終えた。
宿に戻り報告をするべく足早に岐路につく。
…
今の所目ぼしい情報は行方不明の先生が居る事ぐらいか…
それと学園の噂話…こちらは真偽が不明だ。単なる噂かはたまた奇々怪々の化け物が出てくるか…

伝説の魔物が封印されていて復活の予兆とか…やがて古の大悪魔が復活して学園を…いや、学園どころかこの国を恐怖のどん底に陥れる…

…

んな訳ないか…

宿への道を歩きながら、そんな事を考えながら進んだ。

陽は落ち町は夕焼けから夜の様相に変わっていた。

我ながらよく食べよく喋ったもんだ。

詰め所へ戻り報告する。

サリエルは笑顔で出迎える。
「どうだった？　教員初日は？」
「どうもこうもないよ。大変だったぞ」
「うふふふ、お疲れ様」
「意地が悪いぞ、本当」
「マリスは楽しんだみたいよ」
そう言われたマリスは言う。
「特別講師、堪能してきたわ」
「マジか、俺は気苦労ばかりだ。さっさと調査して終わらそう。報告だがマシューはケイネルという教員と揉めていたらしい」

カイルは教師一覧の資料をボードに貼り出しながら言う。
「ケイネルは学園の古株だな」
「俺の調べでは教育方針について対立があったらしい。口論を目撃されてる」
クズハは聞いてくるので俺とやりとりする。
「具体的にはどんな意見の違いなんだ」
「それはまだ調査中だ」
「仮にそれが事件の原因だったとしても殺人にまで発展する対立か？」
「動機としては少し弱いかもな。あとそれ以外だと学園にモンス

ターに対する噂がある。いわゆる学園七不思議みたいな感じで単なる噂話な感じもするがこちらも情報収集中だ」

サリエルは言う。

「明日の調査までもう少し資料を精査しましょう。取り寄せた情報があるわ」

こうして俺たちは資料整理の仕事を始めたのだった。

翌日、朝の打ち合わせをする。

「それじゃ俺とマリスは授業に出るから、カイルとクズハで監督官庁などで情報を漁ってくれ」

「了解」
簡潔に打ち合わせをして調査に向かう。

リュウジとマリスが授業を見る傍ら、カイルとクズハは教育機関の監督署へ来ていた。
そこで情報収集をする。窓口へ行き紋章を提示してカイルが質問する。
「調査部の者だ。魔法学園について調べ物をしてるんだが話を聞きたい」
「はい、どのようなお話でしょうか？」

「マシューという人物についてだ」
「マシュー？　さん…ですか？　う～ん…どんな方なんですか？」
「教員をやってたんだ。何か情報はないか？」
「少々お待ちください、資料を出しますので」
そう言いながら奥へ消え、ほどなく、分厚い本を抱えて戻ってくる。そして彼は言う。
「お待たせしました、学園関係だと最近こちらに見えてる方が居ますね」
その情報にクズハが食いつき質問のやりとりを始める。
「誰が来ている？」

「う〜ん、お名前までは…」
「記録を取ってないのか」
「恐らく、何かの確認だったのでしょう、何かの届け出とかならともかく、簡単な資料の確認などでは教員免許証だけ見せて頂いて、それで対応したんだと思います」
その返答にカイルはマシューの顔写真を見せる。
「この先生だったか分かるか？」
その言葉にたまたまそばを通りかかった別の職員が口を開いた。
「あ、この人…」
カイルとクズハはその職員に視線を向け、カイルは聞いてみる。

「見覚え合ったりはするのか？」
「ええ、十日ほど前ですけど何か資料を確認したいと」
「少し妙に思うんだが教員がこの監督署で教育関連の資料を確認するのはよくある事なのか？」
「たしかに少し珍しいかもしれませんね。この方、マシューさんでしたっけ？　何か調べ物をしてるようで。なんでも学園の出納、いわゆる帳簿係の補佐をしてるようで、その関連じゃないですかね。項目としては学園での備品や標本の類かと。ちょっと待ってくださいね、ええと、この資料の…この分厚い本に履歴がありますでしょう？　要するに学園で使う魔石やモンスターの確保です

よ」
「モンスター！？」
「研究用なのか知りませんけどね。魔法学園では色んな物を集めてるんでしょう」
「…」
「必要ならその個所を指定してください、調査部ですよね？　写しを作ってお渡ししますので」
こうしてカイルとクズハは資料を手に入れ、監督署をあとにする。
帰り道、クズハはカイルに言う。

「マシューがここにに来ていたのは備品やモンスターの追加か？」
「それか別の何かを調べていたか」
「だが資料を見る限り直近の届け出や書類内容の変更に関わってそうな様子はない」
「この資料の写しに事件のヒントがありそうだな」
二人は足掛かりになりそうな手ごたえを感じて帰路に着いた。

放課後の学園。
帰ろうとする俺にジェシーが話しかけてきた。
「おつかれさま、どう？　二日目は」

「まだまだ大変だよ、生徒たちは元気があっていいな」
「そうね、若いっていい事だわ」
「あの元気さを見習わないとな」
「うふふ、頑張ってね、何か気になる事があったら言ってね、力になるから」
「ありがとう、そう言えば生徒たちから聞いたんだが、この学園のお化け騒ぎって知ってるか？　噂になってるだろ」
言われてジェシーは「あ～…あれは…」と少し言葉を濁すような感じになる。なので突っ込んで聞いてみる。
「やっぱり知ってるのか」

彼女は少しだけ困ったような顔をしつつそれについて説明を始めた。

「よくある学院の噂、とかそういう話よ。七不思議とかあるでしょ、学園生活に華を添える一種のスパイスよ。そういうのが好きな子が広めるの、心配しないで。大体魔物自体は実際扱うから…」

俺はその返答に少し面食らいつつ聞く。

「ここの地域では魔物がよく出るのか？　比較的治安は良さそうに見えるが」

実は魔族の侵攻が激しい地域なのかと。

そんな風に思ったがどうやらそうではなく、彼女の説明は続く。

「学院での実習と言うか、偶にね。授業内容で関わるの」
「その関係で魔物も扱うと」
「そういう事。その話に尾ひれがついただけなの」
「じゃあ気にする事もないな」
「新人の先生が扱う事もないから。もし何かあれば私に言って」
「頼りにしてるよ」
「ふふ、任せて！　このお姉さん先生が手本になっちゃうんだから」
そんな朗らかな会話をして道を歩いた。

詰め所へ集合し報告をする。
マリスは言う。
「色々分かったよ。マシューとケイネルが揉めてた原因は白魔法の使い道と応用について意見が分かれたみたいね」
その報告にみんが注目する。
「どうやら応用で白魔法を攻撃手段で使う実地訓練をしてたみたいなの」
その言葉にクズハが聞く。
「白魔法を攻撃に？　どういう事だ？」

だがサリエルは思い当たる節があるようで言う。
「まさか、アンデッド…？」
ご名答のようでマリスは得意げに語り始める。
「そう。一部の回復魔法はアンデッドにダメージを与えられる。その実地訓練をしてたの」
カイルは「そんな事までやるのか」と少々驚いている。
「何年か前に冒険者の間で問題があったらしいの。ダンジョンでアンデッド相手に炎の魔法を使ったら植物が自生するダンジョンで、根や葉っぱが散乱してたりもして燃え広がったのね。それで煙に巻かれて死傷者が出た。それで対策として狭い空間内で白魔

法でアンデッドの対処をする方法が広まって学院のカリキュラムにも組み込まれたのよね。その時賛成派だったケイネルはより実践的な授業として賛成してマシューは学生にはまだ早すぎると反対したの。過去のこの対立が今でも尾を引いててたびたび衝突してたみたいね」

俺は「そんな事があったのか」と言い、マリスとやりとりする。

「ついでに、死亡推定時刻が出たわよ。この前の休みの日の午前中」

「休みの日か」

「何かあるの？」

「教員全員が容疑者になる、全員休みだからな。まあ教員が犯人と決まった訳じゃないが」

マリスも同意して言う。

「もう一度遺体検分から魔法や呪いの類の痕跡がないか注意して見るように依頼しとくね。あと考えられる魔法とかもチェックしとく」

俺は言う。

「それらはマリスに任せるとして、何か他動機の線を洗う方針と具体的な策も立てないとな」

そう言うとカイルが続ける。

「俺の方の調査もマリスの説明と関連がありそうだがマシューは学園の帳簿係も兼ねていたようだ。それと監督署で資料を漁っていた。備品やモンスターの確保についてだ」

その言葉に俺は聞く。

「モンスターの確保？　さっきの話の関連か？」

「ああ。駆除ではなく捕獲だな」

サリエルは合点がいったようで言う。

「白魔法のアンデッドモンスターへの応用で必要なアンデッドモンスターの捕獲をギルドなどでして貰ってたと考えるのが自然ね」

俺は少しだけ思案しながら言う。

「繋がりかけてきたが、もう少し情報が欲しいな、ちょっと調べるか」
そんな言葉にサリエルは言う。
「どうするの？」
「俺とクズハでギルドへ行ってみる。何か情報が無いか確認してくる」
こうして俺とクズハはギルドへ向かった。

受付の人に調査部の紋章を提示し言う。
「ちょっといいかい」

すると受付嬢は答えてくれる。
「調査部の方ですか、お仕事ですか？」
「ああ、魔法学院からの依頼の件を調べてる。アンデッドモンスター捕縛の依頼だ」
「その件ですか…少々お待ちを」
言いながら奥へと消えていく。
少しして戻ってきた受付嬢は資料のファイルを持参してそれを広げて説明してくれる。
「お待たせしました。学院からの依頼はこれですね」
俺とクズハは資料を見ながら言う。

「毎年定期的に依頼してるな」
クズハも「随分前から依頼してるのは事前調査の通りだ」と言う。
受付嬢はそれらを確認しながら言う。
「知っている人の間では馴染みの依頼、クエストになってますね。ただアンデッドモンスターの捕縛という特性上、少し上級者向けですが」
「そうなのか？」
「ええ、討伐なら誰でもできますが、専用の檻や、封入用の壺や呪符が必要ですからね」

クズハも「準備や対処に少し専門性が必要か」と頷く。
「ですので、依頼を受けてた冒険者も限られてましたね」
俺は資料を更に確認していると受付の人は言う。
「ああ、でも、ある時期から依頼が途絶えてますね」
俺は聞いてみる。
「依頼が途絶えてる？　学院の方針が変わったのか？」
その質問に受付の人は答える。
「学院の方からはそんな説明は受けていないですね」
「理由不明で半年ほど前から依頼が途切れがちになってるな」
「その辺りの詳しい事情はあまり存じませんが…」

「う〜ん…校長に聞いてみるしかないか？」
「その辺の事を少し調べますか？　お時間が掛かりますけど」
「頼むよ…あとすまないがその半年前ぐらいでギルドで気になる動きや依頼は無かったか？」
　その問いに受付嬢は少し悩みながら答える。
「そう言われましても…半年前…ですか…どうでしょう、依頼は色々ありますから…」
「なんでもいい、何か普段と違うような事は無かったか思い出してほしいんだ」
「そう言われれば…アンデッドとは関係ないですけど、墓荒らし

が出たという話はありましたね」
「墓荒らし？」
「ええ。人間のではないですけど」
それを聞きクズハは言う。
「動物やペットという事か」
「そうです。ペットや馬車、それに冒険者が使う馬などの動物のお墓
ですね。それが荒らされる事がありました。人間の墓と違って高価なお供え物は無いので、盗掘などで実害は無かったのですが気味の悪い事件だったのは覚えてます」

俺はなんだか妙な繋がりのような匂いを覚え、突っ込んで聞いてみる。
「それはどうなったんだ？」
「期間を開けて起こるのであまり対処はされませんでした。初めの内は見張りのクエストなども貼り出されたんですけどね」
「念のためその資料を借りれるか？」
「はい」
「あとアンデッドモンスターの捕縛を受けていた冒険者は…」
「その資料の下の方に名前が載ってますよ、ええと…あ、ちょうどあちらの席に来てますよ、あの三人組です」

「分かった、ありがとう」

受付嬢から教えられたそこの席へ。

酒を飲んでいるその冒険者を見つけ、話し掛ける。

「ちょっといいか？」

そう話し掛ける三人はこちらに座ったまま向き直った。

大柄で禿げた頭の戦士と、軽装で身軽なシーフのような男、それに初老の魔導士が居てシーフのような男が答える。

「アンタは？」

「調査部だ。少し前の事を調べてる」

紋章を提示すると相手は珍しい物でも見るような顔をしながら話した。

「国の機関だよな？　なんかあったのか？」

「ちょっとした調べ物なんだ。前にアンデッドモンスターの捕縛のクエストをやってたよな」

「ああ、あれか。討伐じゃないから手間も掛かるけど実入りは言い仕事だったよ。俺と戦士のコイツが前衛で魔導士のコイツが封入の壺とかお札でアンデッドやゴーストを捕縛するんだ。さすが魔法学園の仕事だよな、かなり儲かったぜ」

「だけど少し前からクエストをやめてるな」

「そうだ。よく調べてるな。まあ仕事は他にもあるしな」
「アンデッドモンスターが調達できなくなったのか？　そんなような話をチラっと聞いたんだが…モンスターのスポーン、湧き出しが止まったとか、そういう原因か？」
「いいや違うよ。そういう話じゃない」
その言葉にクズハが反応し言う。
「聞いてる話と違うな。モンスター自体が少なくなったか、湧き場所が浄化されてしまったとかいう話じゃないのか？」
その意見には今度は大柄な男が答える。
「そうでもないと思うぞ。やろうと思えば捕縛は続けられたさ…

でもクエスト自体が無くなったんだから仕方ない」

今度は俺が聞く。

「クエストが無くなった？　クエストを辞退したり、学園側にアンデッドの生息数が少なくなったと報告したとかではないんだな？」

すると小さい方の男は答えた。

「俺も詳しくは知らないがとにかく向こうからの依頼が無くなったからだよ。依頼を出す学園側の財政に何かあったんじゃないか？」

そんな話をされた。

俺とクズハは怪訝に思うも、嘘を吐いているような素振りは見えず、聞き込みはそれで終わった。

受付へ戻りさっきの話の続きをする。

「モンスター捕縛の依頼が途絶えた理由とかは判明したか？」

「いえ、やはり特に理由は承ってないですね」

「依頼の中断を申し出た教員はこの人か？」

言いながらマシューの写真を見せる。

「いいえ、違うと思います。こちらに見えた事はあるような気はしますが」

「じゃあこっちの男は？」

言いながら俺はジェシーとライコスの写真を見せた。
すると受付嬢は言う。
「あ、この方ですよ、男性の方。この方が依頼の中止を届け出てますね」
俺とクズハはようやく手掛かりを手に入れる事が出来た。

詰め所へ戻るとカイルとサリエルが出迎えてくれた。
マリスはまだ学園で教師役を続行中だ。
こっちの情報を出す。
「クエストは学園自体が出すのを辞めていたように見えたが、ラ

イコスがギルドへの依頼中止を届け出てる。それとその時期に墓荒らしが出ていたらしい」

今度はカイルが言う。

「マリスと連絡を取りつつ学園の財政やカリキュラムを確認したんだが変更届は出ていない」

俺は言う。

「アンデッドモンスターはどうやって確保してたのかの謎が残る」

「ああ、そこで気付いた事があるんだ」

言いながらカイルはある資料をボードに貼り出す。そして説明する。

「教員の過去を洗ってみたんだが一つ妙味深い経歴の人物が居る」
俺は資料を見ながら言う。
「ライコスじゃないか」
「教員になる前は冒険者をやっている。黒魔術全般を使えるが、ネクロマンサーの資格も持ってる」
俺は「なるほど、そういう事か」と言う。
マリスは納得顔で続ける。
「少し前から墓荒らしも出てたんだよね？　じゃあ結論は出たわね」
クズハは確認するように言う。

「マシューは学園の帳簿係の補佐をしていた」
俺はまとめるように言う。
「ライコスは墓荒らしで動物の遺体を確保し、ネクロマンサーの術でアンデッドに仕立てていた」
サリエルは結論付ける。
「今までギルドにアンデッドの確保依頼を出していたのはライコスで、継続してるフリをして、ギルドへの依頼料を着服していた」
俺は最後の締めをする。
「マシューはそれに気付いてライコスに口封じをされたんだ」

学園に乗り込み学長室へ。
「ライコスはどこです！?」
「授業変更があったようなのだが職員室にも居ないらしくてな」
「すぐに探します、カイル、説明を！　俺とクズハ、マリスで捜索する」
生徒や先生たちが言う。
「さっきまで居たんですけど…」「何か急いでましたね」「実習棟の地下の方へ向かうのを見ましたけど」

駆け足で実習棟へ。
そこには果たして、焦っているようなライコスが居た。
「ライコス！」
俺が叫ぶとライコスはわずかばかりこちらを視認し、駆けだす。
クズハは「待て！」と怒鳴りながら後を追う。
俺もすぐさま駆け出そうとするがマリスが叫ぶ。
「リュウジ！」
マリスが制止し、「あれ…」と指差す方、そこは地下ダンジョン。

そこからモンスターがあふれ出していた。
俺は吐き捨てるように言う。
「あいつ、全部バレたと悟って逃げるための陽動でモンスターを放ったのか！」
「すぐにみんなに知らせないと！」
「俺はクズハでライコスを追う！　マリスは避難誘導を！」
こうして二手に分かれて対応する事になった。

学園は大変な事になった。

ライコスが逃走する為にアンデッドモンスターやそれ以外の魔物はそこらじゅうで暴れまわっている。
教師たちが生徒に叫ぶ。
「上級生は魔法で応戦して！　下級生は今すぐ避難しなさい！」
生徒たちも応答する。
「分かりました！」「みんなこっちよ！」「ファイア！」
それぞれが自分の役割の為に声を掛け合う。
ドカンという魔法の着弾音と共にモンスターが吹き飛ぶ。
学園はパニックになり、小規模ではあるが戦場へと化した。
あちこちで怒号と魔法が乱れ飛ぶ場所へと変化してしまってい

た。

そんな中、裏庭の一角でケイネルが叫ぶ。

「そこ！　何をやっている！　早く逃げんか！」

だがそう声を掛けられた先には恐怖ですくみ、身動きが取れない女生徒が二人。

運の悪い事に、三体のアンデッドモンスターの首が、女生徒に向けられ、そして視線を定まらせた。獲物だと認識したのだ。

駆けだすモンスター。

せまる恐怖に悲鳴を上げる女生徒。

ケイネルは駆け寄り、魔法を打ち出す。モンスター二体は消し飛ぶ。

だが残り一体の突進が止まらなかった。

次の瞬間、ケイネルは女生徒たちの前に身を投げ出し、庇っていた。

鈍い音がして、鮮血が飛び散った。

逃げるライコスを追い詰める俺たち。

他の先生たちも集まり言う。

「ライコス！　調査部の人と学園長から聞いたぞ！　大人しく

捕まれ！」

そう言われるがライコスは攻撃魔法を放ってきた。

大きな魔力の魔法だったが、着弾直前に先生たちによる魔法の障壁が張られダメージはない。

逃げつつも合間合間にこちらを攻撃してくるライコス。

怒り心頭になったクズハは叫ぶ。

「もう我慢ならん、痛い目を見て反省しろ！」

猛り狂った狐神の手に宿る狐火は全力で投げられ、ライコスに向かって進み、爆音と共に炸裂する。

「ぐわっ！」

悲鳴と共に吹き飛ぶライコス。
地面に打ち付けられ、悶絶する。しかし、なおも逃走の為に片手を付き起き上がろうとする所へジェシーが駆け付け言う。
「動かないで！」
「ぐっ！」
「どうしてこんな事を…」
俺たちと他の先生も取り囲み、観念するライコス。
そして先生たちに捕縛され、「こっちへ来い！」と連行される。
ジェシーの「立派な先生だと思ってたのに…」という呟きに俺は傍で立ち並んで寄り添う事しかできなかった。

負傷したケイネルの元へマリスが駆け付ける。
「大丈夫！？」
女子生徒は言う。
「私たちを庇って…」
他の生徒たちも集まってくる。どうやら女子生徒を襲った三匹の魔物は最後の一匹もケイネルが相打ちで倒したようだ。
だがケイネルは深手を負って意識が無い。
そんなケイネルの治療に当たるマリス。
「みんな、手伝って」

だが生徒たちはたじろぐ。
「でも、僕たちはまだ…人間に回復魔法は…」
「怖いのは分かるわ。でも助けが必要なの」
「…」
マリスの声掛けにも生徒たちは決心が付かないようだ。
マリスはケイネルに懸命に回復魔法を掛ける。
だが傷が深い。
心の中で「もう魔力が…」と呟く。
このままだとマズイ…
マリスは魔法を使いながら生徒たちに言う。

「みんな聞いて」
生徒たちはマリスを注視する。
「白魔法を使う者にはね、学ぶべき事があるの」
「…」
「最初のクエストで、不幸にも死人が出てしまう白魔導士も居る。安全な後方任務だと聞いてたのに、次々運ばれる負傷した兵士の最後を見取らなきゃいけない回復術師も居る」
回復魔法が徐々に弱くなり始める。
それでもマリスは続けながら語り掛ける。
「派手な攻撃魔法を使う黒魔導士や、神々しい召喚獣を操る召喚

士と比べて、白魔法はサポート役よ。でも、だからこそ、敵をせん滅する魔法使いと違って、命に一番近いのが白魔導士なの」

消えそうになる魔力を必死に維持しながらマリスは続ける。

「だから、白魔法を使う者に求められるのは、祈りと、詠唱を続ける覚悟。最後の一秒まで、生命を追い求める姿勢なの…だから…今、それを勉強して。ここはそれを学ぶ場所の筈よ」

必死の問いかけ。そして促し。

だが生徒は動かない。

まだ、駄目なの？

そう思った時だった。

逃げ出したモンスターが吐いた火の玉がマリスの元へ飛んでくる。
視界にそれを認めるも、動けないマリス。
しまった…
回復魔法に集中し過ぎた…
回避は…間に合わない…！
だがその時、一人の男子生徒が動いた。
「プロテクト！」
その言葉と共に小さな障壁が現れる。
拙いながらも発動した魔法は火の玉を弾くが、効果は弱く、衝

撃がマリスを襲う。
「くっ！」
マリスは小さく呻きながら横に尻餅を着く。だがそれを別の女子生徒が支えた。
更に別のもう一人の女子生徒が口を開いた。
「ヒール！」
続いて別の生徒も…
「ヒール！」
次々とケイネルに回復魔法を掛ける。
「あなたたち…」

マリスは驚きながらも、嬉しく思う。
マリスの尻餅を支えた生徒は言う。
「私とあの子はプロテクトでこの場所を守ります、だからケイネル先生を」
マリスは頷きながら答える。
「分かったわ。気を付けてね」
その女子生徒は最初にプロテクトを唱えた生徒と共に防衛に徹する。
マリスは再び生徒たちと共にケイネルに回復魔法を掛ける。
「ヒール！」

一際大きな声で魔力を注ぐ。
多数のヒールとプロテクトの魔法が大きな奔流となってオーラのように可視化される。
マリスは思う。
懐かしいわね…この感じ。背中を押される、いえ、優しく包み込まれるような協力の形。
これなら…きっと上手くいく…。
そんな確信が得られる。
熟練の魔導士のマリスの魔法は、生徒たちの魔法に後押しされケイネルの体に強く、そして優しく注ぎ込まれたのだった。

こうして事態は収束していく事になる。
モンスターたちは先生に討伐され、逃走したライコスはクズハとやはり先生たちに捕縛され裁きを受ける事になる。
学園で起こった騒乱は生徒たちを動揺させたが、やがて日常を取り戻していった。

全てが終わって町中を歩く俺とマリス。
立ち寄る病院ではケイネルを生徒たちが囲んでいる。
「先生、良かったですね…」
おずおずとそう言う生徒に、だがケイネルはしかめっ面で返す。
「良くない。お前たちはこんな所で何をしているのだ？　勉強だ。勉強をしろ」
そんな言葉に生徒たちは黙ってしまう。
ケイネルは続ける。
「今回は初めての人体への回復魔法だったが、上手くいったと舞い上がるな。感触と経験を綴り、更なる向上に勤めるのだ」

だが、一人の女子生徒が口を開く。
「勉強はします、でももっと教えてください」
男子生徒も言う。
「宿題だけでは分かりません。どこをどう紐解けばいいのか、何を重点に置いて読み進めるか、指導が欲しいです」
ケイネルは驚いていた。
まさか自分に意見し、学び方について指南を求められるとは思ってなかったのだ。しかしそこは教師。すかさず返答する。
「いいか、魔法と言うのはその根源と精霊たちに影響を受ける。そこをよく理解して…」

「それはどういう意味ですか？」「もっと詳しく」「理解？　理解とはどういう事ですか？」

矢継ぎ早に突っ込まれるケイネル。

「魔、魔法によってだ…使用する魔法によって、神や精霊から借りる力や量も違う。それらを理解し、イメージする事によってその力がどうフィールド、場所へ影響するか、発動する時には体のどの部位に宿り発揮されるか、例えば体の全体なのか、指先なのか、それらをよく考え…」

「その事についてですが、地形効果は？」「相性などはあるのですか」「そもそも神や精霊のルーツは文献により複数あったり曖

昧だったり、解釈の仕方などは…」
ベッドを取り囲み質問攻めする生徒たち。
「むう…うるさいやつらだ。いいか、そもそも魔法と言うのは…」
ケイネルと生徒たちが騒ぎ始めると看護師が来て言う。
「ちょっと！　静かにしてくれますか？　他の患者さんも居るんですよ？」
だが彼らは声を抑えつつ喧々諤々の講義を続ける。
なんとも賑やかな風景だ。
それを見ながら俺とマリスは静かに病院をあとにした。

町中を歩きながら俺はマリスに言う。
「生徒たちも、あの先生も大丈夫そうだな」
「そうね～。上手くやれると思うわ」
「神託は当たらずとも遠からずみたいだしな」
「将来、あの生徒たちから勇者パーティーの仲間が出る可能性があるみたいね」
「そう思えば解決した甲斐もあるってもんだ」
そんな話をしながら歩く。
そして俺は続ける。
「あっという間になったけど少し名残惜しいか？」

「うん、まあちょっと残念だったかな」
短い学園での教師生活を振り返るように思いを巡らすマリス。
「中々出来ない体験だったしな」
「リュウジも新鮮だったんじゃない？」
「いや、俺はもう先生はいいよ」
「そう？　まあまあ似合ってたんじゃない？　タカセ先生？」
「やめて下さいマリス先生」
「ふふふ…」
「ははは…」
二人で笑いながら歩く。

「やっぱり少し変よね」
「俺たちはやっぱり調査部だよな」
「帰って、貰った魔導書の読み返しをしなくちゃ」
「貰った魔導書？」
「学園長からのご褒美。希少なやつ」
「ちゃっかりしてるな」
「勇者の仲間の卵たちに勉強を教えたのよ？」
「そうだな、そう考えれば正当な報酬だ」
そんな話をしてると一人の女性教師が近づいてきた。
俺は言う。

「ジェシー…」
「嘘つき。でもすごいね。潜入捜査官なんて」
「悪かった。内緒にしないと駄目な任務だったんだ」
「分かってる。でも憧れちゃうな」
「そんなすごい仕事じゃない。地味な調査が生業だよ。君の方こそすごいじゃないか」
「そう…？」
「未来ある若者を育てる、こんな素晴らしい仕事は無い」
ジェシーはわずかに微笑みながら言う。
「そう言われたら頑張るしかないわね」

「その意気だ。きっと素晴らしい先生になれるよ」
マリスも言う。
「ケイネル先生も追い越せるわ」
「それは少し大変そう」
ふふふ、とお互い笑い合う。
「元気でな」
「タカセさんも、それとマリスさん、会えて良かったわ」
マリスは「なんかあれば声を掛けて。力になるわ」と言う。
ジェシーは名残惜しそうにしつつも返答する。
「それじゃ、私が学年主任にでもなったら、その時にはまた特別

講師でも頼もうかしら」

「う、また教師か、まあいいか」

「いつかまた会いましょう、それじゃ。お元気で」

手を振り別れる。

こうして事件は終わった。

魔法学園の生徒たちの未来は明るい、そんな風に思いながら貴重な経験と記憶を胸に俺たちの活躍は続くのだった。

第四話　終わり